

DEW
stream 2026

Planning, Design, and Consulting
SHIMIZU CORPORATION

vol.85

DEW vol.85

stream 2026

「考える・そして問いかける」

今年度のDEW冊子では、作品を通じて設計者とDEW委員が対話を重ねることを大切にし、設計者のチャレンジや込めた想いを、より深く掘り下げてお伝えすることを目指しました。近作プロジェクトから選定した作品については、DEW委員が実際に現地へ足を運び取材を行いました。設計者との対話を通して、その土地ならではの息吹や、創造の裏側に秘められた深い洞察をもたらしてくれました。この活動の様子は「Dialogue」と記載のあるページでご紹介しています。ご協力いただいたお客様をはじめ、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

stream DEW：潮流を成す“雫”の活動

「stream DEW」の活動は、設計部ニュースとして1979年に創刊されながらも休刊となっていた冊子「STREAM」の復刊から始まりました。設計本部内の若手を中心に編集委員を任命し、2007年11月に「stream DEW67」を発行、以来編集委員を交代しながら毎年発行しています。「stream DEW」には個人の創造性の発露(雫=DEW)が従業員相互の啓発・情報共有の源であり、それが大きな流れ(潮流=stream)となるという意味を込めています。

- 02 - 05 清水建設 東京木工場
 - 06 - 09 東京ドリームパーク
 - 10 - 13 福岡歯科大学・福岡医療短期大学 新キャンパス整備計画 新本館
 - 14 - 17 清和銀座ビル
 - 18 - 21 第一生命京橋キノテラス
 - 22 - 23 学校法人瀧川学園 滝川中学校・高等学校 総合棟-Main Port-
 - 24 - 27 河北総合病院
 - 28 - 29 花王和歌山研究所 Lifestyle Innovation Center
 - 30 - 33 徳島信用金庫新本店・本部
 - 34 - 35 住友重機械工業横須賀製造所 技術研究・開発棟 Cs'-Lab+
 - 36 - 37 品川女子学院 A・B・C棟
 - 38 - 39 フェアモント東京
 - 40 - 41 Hi-gs 日本橋
 - 42 - 45 プライマル品川大井町
 - 46 - 47 ミタマチテラス
 - 48 - 51 高山商事株式会社 本社
 - 52 - 55 東大寺学園第二体育館 菁々館
 - 56 - 57 國學院大學神殿造替
 - 58 - 59 第一生命日比谷ファースト
 - 60 - 61 メガクニンガン プロジェクト
 - 62 - 63 ZEB SEEKERを活用した脱炭素コンサルティング
 - 64 - 65 人吉・球磨地域の医療連携の取り組みと院内情報連携システム「Hub360」の開発
 - 66 - 67 Pandemic Readyを実現する技術開発
 - 68 - 69 NEDOMーンショット型研究開発事業 大阪・関西万博 出展
 - 70 - 71 日本建築学会設計競技「解築学を可視化する」
 - 72 - 75 留学体験記
-
- 76 - 77 作品データ
 - 78 - 79 DEW活動 多様な学び・成長・挑戦の場
 - 80 木くずを再利用した紙づくり

「木」の 文化と技術と魅力を 発信する拠点

清水建設 東京木工場 SHIMIZU TOKYO MOKKOUJOU



木の可能性を追求する
意匠設計 菊田 大典



適材適所の木の利用
構造設計 佐藤 彰



木と鉄のハイブリット構造
構造設計 志村 雄輝



木を魅せる設備と工場排熱の利用
設備設計 瀧上 征



木の生産施設のための照明
設備設計 今村 蓮



工場棟作業場（シミズ ハイウッド張弦梁）



来客棟事務所（アーチ梁）



工場棟外観



来客棟外観



森のギャラリー外観

木の可能性を追求する

江戸時代から貯木場として知られる江東区木場の平久川沿いで、140年以上稼働してきた清水建設東京木工場の建て替え計画です。

2階建ての来客棟を道路側、3階建ての工場棟を川（平久川）側に配置し、2棟を繋ぐ位置に体験の森を計画しました。道路に面した森のギャラリーは、材木置場だった頃の風景と重なるように、スギ材をルーバーに用いた回廊としました。建物を分棟配置することで耐火条件が整理され、各棟で異なる木鋼技術に挑戦できました。工場棟は耐火性能を有する集成材（シミズ ハイウッド®）の耐火建築物のモデルシステム、来客棟は一般流通材による準耐火建築物のモデルシステムとして設計・開発を行いました。

工場棟は、清水建設の木の独自技術を進化させ、シミズ ハイウッドの梁に鋼材を組合せた張弦梁に挑戦しました。木と鉄の取合部では、火災時に鉄の熱を木に伝えてしまうという課題が発生します。そこでモルタルを利用した接合部を開発し、技術の拡張を図りました。

来客棟は、一般流通材による長さや断面などの制限を克服し、木のアーチ梁構造や面材張大壁など汎用性の高い木鋼技術を開発することができました。

どの建物も木と鉄骨の架構がそのまま空間になることを目指しました。（菊田）

「新」東京木工場に込めた チャレンジを聞かせてください

菊田：木工場のコンセプトである「木利用の可能性を拡げる施設づくり」を追求したことです。木構造分科会を立上げ、木工場、現場、生産技術本部、設計、木業者が合同で、製品の製作から搬入、取付方に至るまで詳細に議論して進めていきました。長いプロジェクトだったので、メンバーの入れ替わりもありましたが、個別のアイデアをバラバラに寄せ集めたような建物にならないように、ルールを共有しながら設計を進めました。

佐藤：工場棟(耐火建築物)と来客棟(準耐火建築物)のそれぞれだからできることを考えました。工場棟では、「清水建設だからできる技術」の発信として、シミズハイウッドに代表されるような独自技術をアピールする構造提案や技術開発を目指しました。その一つが、張弦梁の木と鉄の取合い部に熱伝導を抑えるモルタルを使った接合部です。これによって、スリム耐火ウッドと鉄骨の取合いが容易になったと思います。来客棟では、「誰でもできる発想」の提案として、アーチに使った一般流通材や、住宅レベルでも使われる汎用的な面材張大壁の応用など、特別な材料や技術がなくても「使い方次第でこんなことができるんだ」と思ってもらえるような建物を目指しました。

原田：木は施工中の仮設材取付による日焼けやビス跡などがそのまま引き渡し時に仕上面になるというのが他の構造体との大きな違いです。そのため、安全上必要な仮設も取付が制限される場面が多くありました。しかし、ハイウッドスラブやハイウッドビーム、CLT壁を全て表しとする計画だったからこそ、どのような施工計画とすれば木をきれいに見せることができるかを一生懸命考えることができました。結果として、地組ヤードの計画や施工段階ごとのステージ足場の高さ設定等の工夫により、木をきれいに仕上げるだけでなく、現場はスッキリと整備され、後工程の手間も大幅に短縮しながら計画を進

めることができました。現場と一緒に考え、悩み、喜び合えることは大きなやりがいだと感じています。

金坂：木工場としては、私たちが長年培ってきた「伝統的な匠の技」と、CNCルーターや木加工ロボットといった「最新のデジタル加工技術」を融合させた、新しいものづくりの拠点にしたいという期待が一番大きかったです。単なる加工場ではなく、お施主様と設計者や現場、そして木工場と直接コミュニケーションをとりながら、ここでしかできない、複雑で付加価値の高い木質空間を生み出せる場所にしたい、という強い思いがありました。



木工場×設計の打合せ

森のギャラリーでのインタビュー風景

「適材適所」で木を使う

DEW：それぞれの立場で木に対してどのように向き合ったのでしょうか。

菊田：単に木を使うこと自体を目的とせず、「圧縮に強い」「手触りが良い」といった木の長所を生かすことをとにかく考えました。無理に木を使うのではなく、適材適所で木を使いたいと考えていました。内装についても、木や鉄骨などを仕上げて隠さず生かせるように計画をしています。

佐藤：来客棟の屋根架構は、簡単な継ぎ方で最小の断面をそのまま見せるジョイントシステム (Skip Joint System) を開発しました。形は圧縮で効率的に効くアーチとし、燃え代設計が不要な準耐火構造

(ロ-1)において、構造的に必要なサイズをそのまま見せ、極限まで細い材で構成。木の適材適所の利用という一貫した考えの元、様々なスタディを経て、最もシンプルな構造が一番きれいではという結論に至り、この形としました。

原田：技術的にはスリム耐火ウッドで1m角の柱をつくり、それにならった大スパンを飛ばすといった計画も可能です。しかし、そういった計画を木で行う必要性はあるのか。施工性やコストなど様々な観点で検討を重ねながら、適材適所の木の利用を広めていくことが重要だと思います。



実際に建物を使ってみて

DEW：新しくなった木工場はいかがですか。

金坂：実際にできた木工場は、木の香りや温もりを常と感じられる、本当に素晴らしい空間になりました。見学に来られたお客様に、私たちの技術力や木の魅力を直接お伝えできる場所になったことに、とても満足しています。設計者の意図を直接伺い、一緒に検証を重ねられたことが、空間全体の統一感や高い品質につながったと感じています。適材適所で様々な樹種を使い分け、木の多様な表情を空間全体で表現できたことは、東京木工場としても大変嬉しく思っています。



(インタビュー：DEW委員 南川、諸星、前田、岡、江頭、澤田)

放送局の多様な コンテンツを展開する 複合エンタメ施設

東京ドリームパーク TOKYO DREAM PARK



有明に新しいエンタメの聖地を！
意匠設計 石川 慎一郎



夢中からはじまる！
意匠設計 小野 智也



高度な協働と地道な努力の果てに
構造設計 南 博之



何物にも代えがたい達成感！
設備設計 大多和 真



音環境ではなく音品質を設計
電気設計 野崎 紘平



風と緑、人の夢がつながる場所に
外構設計 周 予穹 (F4)

F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



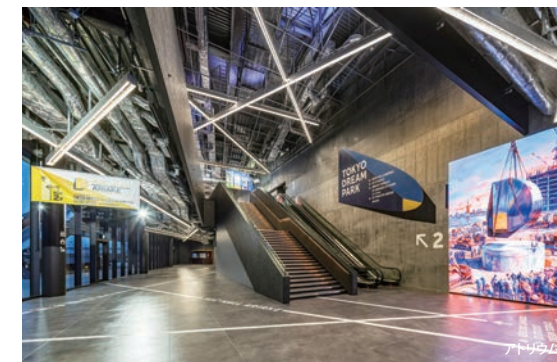
エントランス



夜景



劇場



多目的ホール



多目的ホール

有明に文化交流拠点を創出

本計画では、イベント時の高密度利用と平時の開放性、複数用途の同時運用に加え、観客・運営者・演者を三位一体で支える施設構成を両立することが課題でした。そこで劇場と多目的ホールを背中合わせに配置し、搬出入などのバック動線を中央に集約するとともに、街へ開かれたホワイエをめぐらせることで、運営効率と都市への開放性

を両立しました。外観は有明の人工的な地形や層状に重なるインフラに呼応し、緑と内外部動線が多様なコンテンツの周囲を巻く構成とし、回遊と滞在を生む計画としました。多様な芸術・文化コンテンツが立体的につながり、リアルな体験の熱量を世界へひらきながら、日常的な回遊と多様な体験を生む拠点が実現しました。

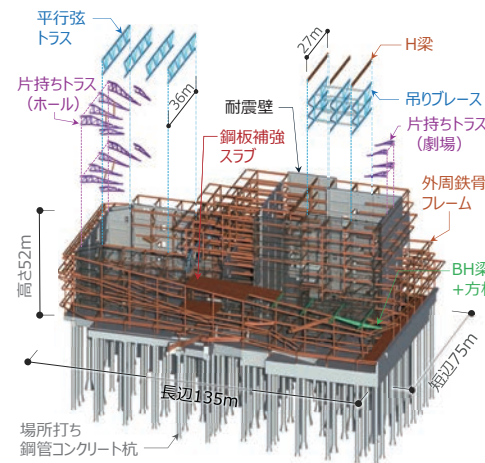
2つの大空間を内包する 構造計画

DEW：アトリウム、壁のコンクリート打放しがとても印象的ですが、このRC壁が主要な構造体なのでしょう。

南：その通りです。多目的ホールと劇場という2つの大空間を取り囲むように配置した耐震壁が、建物に生じる地震力のほぼ全てを負担する計画としました。これによって、①外周鉄骨フレームを地震から解放できるので、抜け感のあるアトリウムや街に開かれたホワイエなどの空間を創り出すことができました。また、②2つの大空間の遮音性能の向上や、③3層に跨る巨大スロープが地震時に予期せず損傷することを防止する効果もあるので、一石三鳥と言えます。

DEW：なるほど！その他に、多目的ホールと劇場を1つの建物に共存させるために、構造的に工夫したことはありますか。

南：当社独自の防振対策を進化させて適用したことです。あまり知られていませんが、都市型ライブホールの課題として、多数の観客が音楽に合わせて上下方向に動く「タテノリ」によって、建物内の他室や



構造架構計画

周辺建物がまるで地震のように揺れてしまうことがあります。このためタテノリ禁止の運営を余儀なくされるホールも多いのですが、今回は多目的ホール1階に「ダイナミック・ライブ・フロア®」を導入することによって、この問題を抜本的に解決しました。タテノリの揺れを9割低減できるため、多目的ホールでタテノリをしても、劇場に居る人が揺れを感じることはほとんどありません。

知識を技術に変えて取組む

DEW：劇場、多目的ホール、放送スタジオ、エンタメなど、特殊な用途が複雑に絡み合った建物ですが電気設備として難しかったことなどはありますか？

野崎：複数用途のエリアに対する電源構成、ノイズ対策、放送局特有の設備など、様々な配慮が必要でしたが、特に重要だったのはノイズ対策です。舞台音響や放送音声などに使われるスピーカーは電気信号を空気振動に変えて音を発しているため、電気ノイズが入ると音の設備として使い物にならなくなってしまいます。ノイズ対策は、書店や図書館などの文献に加え、協力業者さんへのヒアリングを通して知識を現代版に更新し、参考案件の見学で現地を見て実物と知識をつなげ、技術に昇華させて設計しました。



多目的ホール内でのインタビュー風景

大空間の温熱快適性と静粛性を両立

DEW：機械設備として難しかったことなどありますか？

大多和：特に空調設備の「消音対策」に注力しました。ホールと劇場という、静寂が求められる空間のため、設計から工事段階まで消音・防振の専門メーカーと密に打ち合わせを重ね、最適な仕様を追求しました。特に難しかったのは、ホールと劇場が空調機械室を挟んで隣り合っている点です。同時公演も想定される中で、互いの音響に影響を与えないよう

配慮する必要がありましたが、検討を重ねたことで、納得のいく計画に仕上がったと感じています。

また最大収容人数5,000人のホールでは、詳細な熱シミュレーションを繰り返すことで、空調機の風量や吹出口・吸込口の配置を最適化しました。工事完了時にはホール内の平面・断面の温度分布を測定し、その効果を実証しています。



空に、丘をつくる ― 外構計画

DEW：外構計画のこだわりを教えてください。

周：外構計画のコンセプトは、「空に浮かぶ丘の風景」です。広がりのある屋上空間と、海風を感じられる有明の立地特性を生かし、地上から屋上まで開放的な体験が連続する風景を目指しました。一方、臨海副都心エリアでは高い緑化率が求められるため、十分な緑量を確保しながら、建築への荷重負担を抑えることが課題となりました。そこで、高木主体ではなく、低木、多年草、地被植物を中心に構成し、起伏のある地形と一体となった草原のような植栽景観を計画しました。

植物の高さや色彩、季節ごとの表情、背景となる景観の広がりを意識し植栽を構成しつつ、在来種と有明の環境に適した園芸品種を組み合わせることで、海辺の風や光、空の広がりと調和する、この場所ならではの風景づくりに挑戦しました。



休憩スペースとなる段状の植栽帯

(インタビュー：DEW委員 南川、藤田、岡、澤田、今村、高木)

積極的に勉強したくなるような 学生ファーストの学校づくり

福岡歯科大学・福岡医療短期大学 新キャンパス整備計画 新本館

FUKUOKA DENTAL COLLEGE + FUKUOKA COLLEGE OF HEALTH SCIENCES
NEW CAMPUS DEVELOPMENT PROJECT : NEW MAIN BUILDING



ON/OFFを手助けする空間作りで
国家試験合格率UPを目指す
意匠設計 遠藤 由貴



長短スパンの架構の組み合わせで
メリハリのある空間を実現
構造設計 伊藤 雅崇



運用BEIの可視化で
最適な設備運用を実現
設備設計 塚原 和佳奈



人の動きに寄り添う光で
安心と無駄のない運用へ
電気設計 井上 幹大



学園の顔になる「ON」のファサード



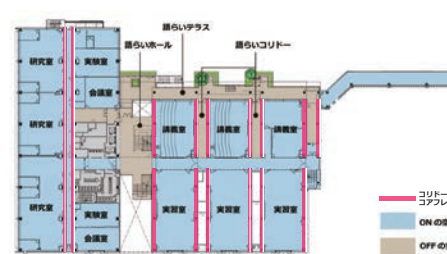
木と緑に囲まれた「OFF」のファサード



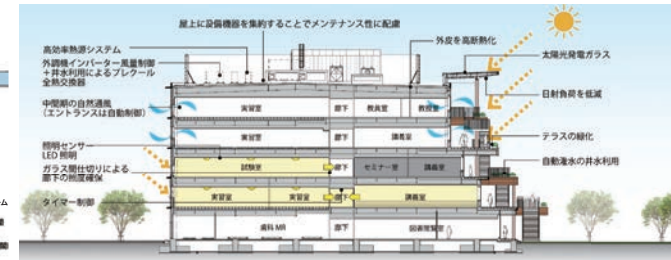
自然光を取り入れた明るい無柱の大実習室で専門技術を研鑽する



講義室の間に設けたロッカーエリア「語らいコリドー」で、授業の合間にほっと一息



ONとOFFの空間が明確な空間構成とコリドーコアフレーム



省エネにも寄与する設備計画



緑と外の空気で大ブレスできる「語らいテラス」で学生と教職員が出会う

学びの空間と憩いの空間の切り替えで 勉強に集中できる環境づくり

新本館は、福岡歯科大学（歯科医師養成）と福岡医療短期大学（歯科衛生士養成）を統合した建物です。国家試験合格率向上を目指し、学習効果を高めるため、集中して学べる「ON」の空間と、リラックスできる「OFF」の空間という明確な二面性を持つ空間構成とし、利用者の気持ちの切り替えを促します。

学びに集中できるONの空間と 木と緑に囲まれたOFFの空間

学びの空間は、明るく快適な環境で、学生と教職員の距離を近づけ、適度な緊張感の中で専門技術を研鑽できる空間としました。憩いの空間は、木と緑に囲まれた休息と交流の場として計画しています。講義室間のロッカーエリア「語らいコリドー」や、屋外の「語らいテラス」は学生と教職員が自然と出会い、日常的なコミュニケーションが誘発されることを目指しました。（遠藤）

気持ちの切り替えと同時に 省エネに寄与する設備計画

気持ちの切り替えを促すため、自然換気や照明のタイマー制御により、授業と休憩のスケジュールに合わせた室内環境の切り替えが可能な計画としました。これらの運用は省エネルギー化にも寄与し、BEI値0.59（ZEB Oriented相当）を達成しています。（塚原・井上）

チームで 建物のコンセプトを実現させる

DEW：意匠・構造・設備・電気それぞれの視点で、こだわった箇所を教えてください。

遠藤：「学習効果UPのために“学び”と“憩い”のメリハリで気持ちの切り替えを促す」というコンセプトの中で、このテラスは「憩い」を実現するために取り組んだ空間です。木目風の化粧打放型枠の凹凸や色彩について3Dを用いて詳細に検討し、モックアップも用いて細部の見え方で綿密に検証しました。植栽計画も含めて、テラス全体で、勉強の合間にリラックスできるような木に囲まれた空間を追い求めました。

伊藤：テラス上部の大庇については、構造も試行錯誤を重ねました。跳ねだしの大きな庇に対して、ルーバーとトップライトのデザインを邪魔しないように、ブレースが目立たない構造架構を検討しました。鉄骨柱の柱頭もすっきりさせ、テラス全体の印象に配慮しています。

遠藤：構造設計と協力して検討した大庇とこのテラス空間は、講義室内へ差し込む日射対策としても効果を発揮するよう計画していて、環境負荷の軽減にも寄与しました。



医療大学ならではの取組み

塚原・千本：設備設計としては、医療大学ならではの設備や研究室が多く、求められる設備が室ごとに異なっていたために、その情報の整理に特に注力しました。既存校舎での使われ方を先生に直接ヒアリングしたり、現地を視察するなどして、配線・配管・排水の要否などを丁寧に確認しました。

伊藤：構造の計画も、この大学ならではの工夫があります。ロングスパンの大きな講義室の間に、「語らいコリドー」という短スパンで細長いロッカースペースを設けました。この短スパンの箇所を構造的に固めることで、耐震性能を高めると同時に、天井内をダクトスペースとしても利用し、構造と設備が一体となった計画としました。

遠藤：「語らいコリドー」は、講義の間の休憩時間に

ちょっと一息ついたり、そのままテラスに出られる場所となっており、気持ちの切り替えを促す空間としての役割も果たしています。

井上：段状のテラスなので、階段の照明取り付け位置にも試行錯誤しましたが、夜遅くまで勉強する学生のためにも、帰宅ルートを明るく照らすことが大事と考え、スポットライトを施しました。室内の照明計画については、既存校舎を使われていた先生方が使いやすいように、新本館での使い勝手を合わせるようにしました。旧本館の照明制御は古いものでしたが、今発売されている製品のなかでもなるべく使い勝手が近いものを選定したうえで、省エネに寄与する自動制御を組み込みました。



長期にわたるキャンパスの再編 部署を超えてつないでいくバトン



DEW：キャンパス全体の整備計画として、隣接する病院、記念講堂、今回計画の新本館、そして今後は体育館、アニマルセンターと建替え計画が続いていきますが、全体として意識されていたことはありますか。

遠藤：私は、新本館と同時に、キャンパス全体のマスタープランを検討する初期段階から関わりました。マスタープランとしては、最終的に「語らい広場」を中心に学園の施設がつながっていく回遊型のキャンパスを目指しました。今後、体育館やアニマルセンターは別の部署が設計を担当しますが、長期にわたる設計期間の中で発生する様々な可能性にも柔軟に対応

できる、しなやかな骨格になっていると思います。

千本：私は、今回の新本館より以前の記念講堂の工事監理段階から関わっています。現在も九州支店の設計部として体育館の設計に取り組んでおり、長期にわたるプロジェクトにおける将来を見据えたインフラ計画の重要性を感じています。

端野：最初は病院の建替え計画から始まったプロジェクトでしたが、設計着手から10年が経ち、様々な部署・多くの人が関わるプロジェクトになったことを嬉しく思っています。設計の担当が変わったとしても、清水建設に任せておけば安心、と思っていただ

けるような関係性をお客様と築いていくために、オールシミズで連携していくことが肝要だと考えています。



(インタビュー：DEW委員 南川、江頭、松浦、澤田、姫野)

伝統の服を着せる
風格と革新を持つデザイン

清和銀座ビル SEIWA GINZA



伝統と革新を纏う建築の実現
意匠設計 谷津 健志



外装デザインの多角的な試行
意匠設計 小林 稜治



内外装を貫くコンセプトの具現化
意匠設計 寺嶋 啓介



「暖簾」をモチーフとした外装デザイン

清和銀座ビルは、銀座中央通りにふさわしい存在感を意識した商業複合施設です。外装には、かつて銀座街を彩った「暖簾」をモチーフとして、光を受けて表情を変えるステンレスルーバーを採用。時間や季節ごとに印象が変わり、常に更新され続ける銀座の風景と呼応する建築を目指しました。（谷津）



銀座に揺らめく銀の暖簾

DEW: 清和銀座ビルは外装のステンスルーバーと3次元曲面底が特徴的だと思いますが、設計上、特に配慮したことを教えてください。

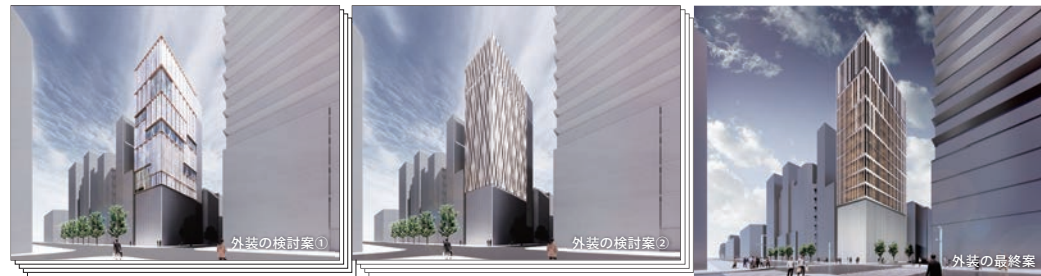
谷津: 外装には角度が全て異なるステンスルーバーを用い、かつて銀座の街を彩った「暖簾」の揺らめきを表現しています。ルーバーの角度については、銀座5丁目交差点からの見え方を含め、銀座の街並みにふさわしい上質で革新的な意匠を実現するために、光の反射によって、最も美しく見えるルーバーの「見付寸法」「ピッチ」「ステンレスの仕上」を繰り返し検討しました。

小林: デザイン検討には、主にRhincerosとGrasshopperを活用しました。効率的かつ多角的な検証が可能のため、初期のデザイン立案において非常に有効でし

た。特にルーバーピッチの検討では、外部からの視線遮断と内部の開口率確保という相反する要素を3Dモデル上で精緻にスタディし、両者のバランスが取れた最適解を導き出しています。

寺嶋: 製作・取付の精度が見え方に大きく影響する構成のため、監理段階ではモックアップでルーバーの素材・照明の見え方を確認し、現場スタッフと吊込や施工方法を打合せの上、精度管理を徹底しました。

谷津: 私・小林さん・寺嶋さんの若手メンバーで、それぞれの考えや案を持ち寄り、膨大な数のスタディを重ね、様々な可能性を模索しました。お客様とも密にコミュニケーションをとり、プロジェクトの方向性を共有・合意形成できたことで、プロジェクトの実現に繋がったと思います。



銀座を彩る照明計画

DEW: 内外装ともに照明計画が際立ちますが、意匠的に意識した点と実現に向けて注力した点を教えてください。

谷津: ステンスルーバーの素材感やそのディティールを美しく見せる光の当て方をモックアップにて検討・確認を行い、昼と夜で異なる表情を映し出すように計画しました。夜間景観への配慮を含め、いつでもどこから見ても品格や優美さを感じられる建築を目指しました。

寺嶋: 注力した点は意匠性と運用面の両立です。建築のデザインコンセプトとして、光の操作は特に重要だったので、外装を照らす照明器具やエントランスを彩るサインエージなどは意匠的にかなりこだわりました。外装の照明については、ライティングの美しさはもちろんのこと、外部から照明器具が見えないことと室内側から容易に点検可能であることを両立できる位置を検討し、諸条件を丁寧に整理しながら現場との調整を重ねました。



(インタビュー: DEW委員 南川、前田、江頭、川田)

都市に温もりと生命力を

第一生命京橋キノテラス

DAI-ICHI LIFE KYOBASHI KINO TERRACE



都心のど真ん中に創る
木による“Well-being”な空間
意匠設計 永山 晃平



木と鉄の特性を活かして実現した
開放的なオフィス空間
構造設計 武田 典佳



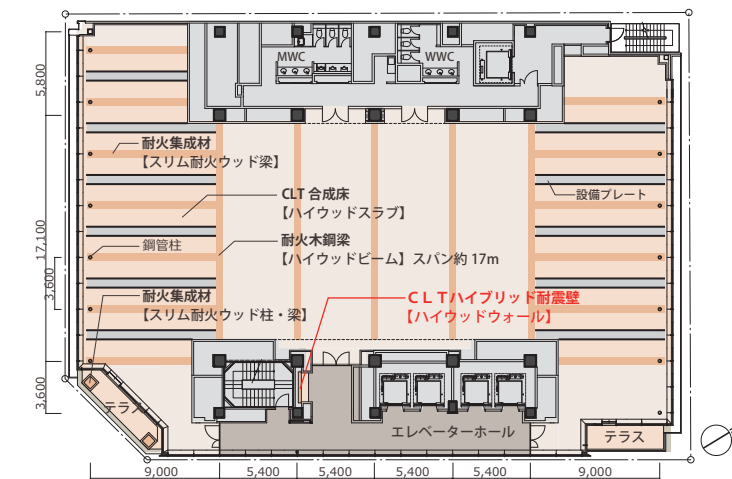
木の温もりと機能性が調和した
心地よいオフィス照明の実現
電気設計 小西 優斗



かつて木や鉄を扱う職人たちの活気で満ちていた京橋の地に建つ 木造と鉄骨造によるハイブリッド構造の賃貸オフィスの計画



外周部の梁をなくし 鋼管柱を採用することで 高い開放性と眺望をもつ窓廻りを実現



基準階平面兼天伏



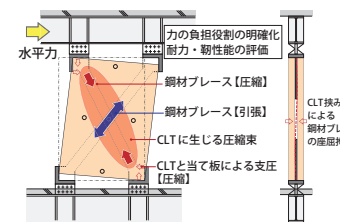
鋼材プレースをCLTで挟み込む製作過程



実大試験体を用いたCLT耐震壁の性能検証実験



CLT耐震壁の据置の様子



CLTハイブリッド耐震壁 概念図

木造による“Well-being”な執務空間

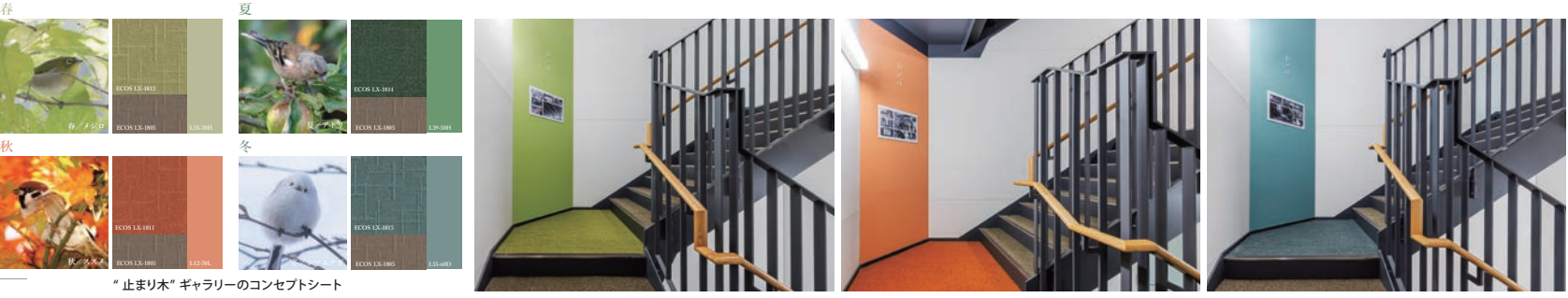
分散コアの平面計画により、窓廻りの開放性を合理的に生み出すことで、都心にありながら、周囲の豊かな緑景や空、季節の移ろいや風を余すところなく享受できる執務空間としました。テラスやピロティ空間には柱や軒天井に木材を利用し、都市景観に木の温もりを添えています。
また、「シミズ ハイウッド®」技術を用いながら、約1,100m³の国産木材利用により約740tのCO₂を固定し、電炉材活用を含め建設時のCO₂排出量を約37.5%削減しました。(永山)

構造合理性と空間の質の両立を追求

基準階では、鉄骨造のプレース付きラーメン構造による耐震コアを2箇所分散配置することで、水平剛性および捻れ剛性を確保し、すべての水平力を負担しています。これにより、外周架構を地震力から解放でき、執務空間に面する部分には細い鋼管柱(214 ~ 244φ)を採用し、窓廻りの高い開放性と眺望を実現しました。
ハイウッドウォール(CLTハイブリッド耐震壁)は、圧縮力に強い木材と引張力に強い鋼材を、それぞれの特性を活かして組み合わせた耐震壁部材です。地震時に生じる圧縮力をCLTが、引張力を鋼材プレースが負担することで、中高層建築に求められる高い耐力と変形性能を確保しています。(武田)

建物コンセプトを細部のデザインまで落とし込み、“Well-being”を感じられる空間を創出

建物の“幹”である階段室には“止まり木”のギャラリーを提案しました。小鳥が枝で羽を休めるように利用者が立ち止まり、本建物完成までの過程を計78枚の写真で巡ることができます。日本の四季を表現したアクセントカラーには、踊り場の段差に対する注意喚起の機能も付加することで、安全で豊かな階段空間とすることができました。



“止まり木”ギャラリーのコンセプトシート

ピクトサインは、構造や内装材に使用されたスギ・マツ・ヒノキといった針葉樹林の地図記号をモチーフとしてデザインしました。CLT耐震壁前のベンチには施工中に生まれた木の端材を敷き詰め、木の香りを楽しむこともできます。各所にやさやかな“Well-being”をしのばせることで、利用者の生活に小さな彩りを添える空間を目指しました。(永山)



木の表情が浮かび上がり、都市の新たな景観を創る

専有部の天井には設備プレートを設け、必要な防災設備や照明を集約する計画としました。この設備プレートは、防災設備の設置基準に準拠しつつ、テナント専有部での間仕切り設置にも対応可能なモジュール設定で設置しています。設備プレートは配線経路としても機能し、上部に吸音材を設置することで消音効果にも寄与しています。設備プレートの側面には、3面発光のLEDライン照明を横向きに設置することで、木天井や木梁にも光を届け、室内の広がり演出しながらもオフィス空間としての照度を確保するよう工夫しました。また、開放性の高い窓(高さ3850mm)により昼光利用が期待できるため、昼光センサーを設置することで照明設備の一次エネルギー消費量を削減しています。(小西)

専有部の照明は、モックアップでの検証を経て、木の温もりと質感が最も美しく際立つ「4000K」の色温度を採用しました。この柔らかな光は低層部にもつながり、建物全体に静かな統一感をもたらしています。中央通りの街並みにも呼応するように溶け込み、この場所ならではの新しい景観を優しく創り出しています。(永山・小西)



竣工後の家族見学会では カンナ掛け体験やキーホルダーづくりによる木育活動



解体前の「studio kino style」の様子 有識者見学会の様子 マスコミ見学会の様子

木の技術や温もりを、専門家から子どもたちまで

ビル解体前には木の魅力を発信する「studio kino style」を、上棟後には有識者やマスコミへの見学会を開催しました。竣工後の関係者の家族見学会では、カンナ掛け体験やキーホルダーづくりによる木育活動を営業・木工場・現場・設計が一体となって運営しました。「中高層木質オフィスビル」という先進的な試みを単なる建設プロジェクトに留めず、木と触れ合う機会を積極的に創出することで、当社の木質技術や木の温もりを、専門家から子どもたちまで幅広く発信しました。(永山)

歴史をのせて航海する学び舎

学校法人瀧川学園
滝川中学校・高等学校
総合棟-Main Port-

TAKIGAWA GAKUEN EDUCATIONAL INSTITUTION
TAKIGAWA JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL
COMPREHENSIVE BUILDING - MAIN PORT -



生徒自らが居場所を見つける
多様な視座を持つ建築

意匠設計 加地 則之



無機質なコンクリートに
チークの木肌と赤が映える

意匠設計 石坂 臨



学校と立地の個性を刻印
生徒の誇りとなる空間

意匠設計 井筒 英理子(F4)

F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



大階段とつづら折りの階段で 1～3 階をつなぐ「STEP COMMONS」



長さ100mにわたるリニアな外観



3階「INCUBATION PLAT」



エントランス上部に跳ね出す「LECTURE THEATER」



スクールカラー「板宿レッド」を配した「TAKIGAWA ARENA」



階数表示サイン



マッチ棒を動かすと使用中の文字が現れる

「質実剛健」の校風に挿入された
多様な個性が交差する柔らかな空間

男子校から共学化への転換期を機に、伝統校における「学び舎」の再定義を試みました。既存校舎に接続する新総合棟に求められたのは、多様な生徒や教職員が交差する次世代の教育環境です。設計では、変化を柔軟に受け止め、自発的な活動を誘発する空間を目指しました。上下階を立体的に繋ぐ「STEP COMMONS」により、単なる移動空間を超えた交流の場を創出。さらにメイン動線となる3階には、視覚的ネットワークの軸となる「INCUBATION PLAT」を配置し、下階での発表や学び合い、運動といった多角的な活動を見通せる構成としました。(加地)

「居場所の提供」から「視座の設計」へ

誰かの挑戦や失敗、一步を踏み出す姿と、それを見守る人。「INCUBATION PLAT」からは、そうした日常の活気あるドラマを立体的に眺めることができます。生徒の居場所をあらかじめ用意するのではなく、自ら居場所を発見できる「視座」を設計することで、生徒の能動性と未来への可能性を引き出す場としました。(石坂)

建学の記憶「マッチ」の意匠により
アイデンティティを継承

「日本のマッチ王」瀧川辨三氏が私財を投じて創立した学園の歴史に着想を得て、サインやインテリアにマッチの意匠を展開しました。学校名に由来する「滝」や「川」の流れを表現したマッチ棒の意匠は、港町・神戸の「船」をモチーフとし、内外装ともに美しく呼応しています。サイン盤面はマッチ箱の比率からサイズを割り出すなど、学園のアイデンティティを現代の建築空間に刻印しています。(井筒)

既存の豊かな緑地を活かした 「森の中の病院」

河北総合病院 KAWAKITA GENERAL HOSPITAL



建築・設備・電気が一体となり
緑を活かした空間を演出
意匠設計 石井 康平



高度急性期病院における
環境に配慮した設備計画
設備設計 古本 美希



病院の
安心安全を支える設備計画
電気設計 馬込 仁総



既存緑地の緑に囲まれたメインアプローチ



保全緑地の緑を取り込む外来ホスピタルコリドー



保存樹を避けた建物配置と縦基調の外装デザイン



都心に残る貴重な緑を活かした「森の中の病院」

武蔵野の保全緑地の景観を活かした 外来ホスピタルコリドーの計画

土地区画整理事業の一部として、353床を有する高度急性期機能を備えた総合病院の建替えを計画しました。かつての屋敷林の豊かな既存樹木を保全緑地として活かした、「森の中の病院」をコンセプトとしました。2階の外来ホスピタルコリドーは、保全緑地側に大開口を配置し、緑を取り込むことによって自然と調和した癒しの空間を創出しています。内部の空間は緑と調和するインテリア、柔らかな照明計画などにより、患者やスタッフの憩いの場となるように計画しました。

保存樹を避けた雁行配置と外構計画

敷地内に点在する保存樹を避けるように建物を雁行配置したことで、住宅街への圧迫感も低減されています。雁行配置したボリュームの間には、保存樹と調和した緑を計画、そこに面する内装には自然素材や多摩産木材を採用し、一体的に緑を感じることができます。

都内急性期病院で初のZEB Oriented取得

敷地形状により病棟は東西軸に配置されています。東西面の開口部を最小化した上で、Low-Eペアガラス等を採用することで、建物にかかる負荷を減らしました。高効率機器やコジェネの導入、病棟の利用状況に合わせた換気量制御などのアクティブ手法により、一次エネルギー消費量34％削減し、ZEB Orientedを達成しています。

高度急性期病院における 豊かな既存緑地を活かした 癒しの空間づくり

「森の中の病院」の実現へ向けて

DEW:「森の中の病院」というコンセプトの中で特に何を大切にしてい取り組まれましたか？

石井:計画敷地には古くから残る屋敷林が残っており、この豊かな緑を残しながらの病院建替えが求められていました。急性期病院のため、高度な治療を提供するための空間や設備と、緑を活かした癒しの空間の両立を、常に意識して取り組みました。開院後には外構や外来待合で緑を感じる患者様の姿を見て、嬉しく思っています。



自然素材を活用したメインエントランス

緑を取り込む空間づくり

DEW:2階の外来ホスピタルコリドーの空間づくりについて教えてください。

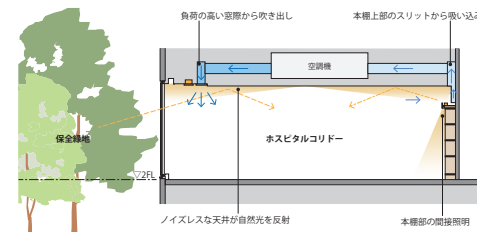
石井:既存の緑地が位置する南西側に大きく開口を取れるような平面配置とし、サッシは床から天井までの高さとする事で、まるで森の中にいるような空間を演出しています。今回の敷地で最も緑を感じられる場所は、患者様の癒しの場として平面計画をした外来待合です。窓と反対側の壁面には50mのライブラリー壁を設け、外来に必要な待合モニターやパンフレット置場、病院の歴史展示を、棚内部に埋め込むよう計画しています。



緑を取り込む外来ホスピタルコリドー

DEW:空調・電氣的な工夫についても教えてください。

石井:空調については、大きな窓部分の熱負荷が高いため、窓際に吹き出しを設けており、本棚上部のスリットから吸い込む計画としました。照明については窓際と本棚に仕込んだ間接照明で全体の照度を確保しています。照明器具の選定や配置については、照度計算を何度も実施して、ソファに座る患者様の手元で十分な照度を確保しています。ホスピタルコリドーの中央天井部には、空調や照明を配置せず、自然光がノイズレスな天井に反射して緑が待合中央部まで感じられるよう配慮しています。



ノイズレスな天井を実現する空調・照明計画



「BASE」を強調する内装・照明計画



各「BASE」は裏でスタッフステーションと繋がる



看護師の動線を短縮する「BASE」配置

病棟運営に合わせた病棟計画

DEW:病棟計画について教えてください。

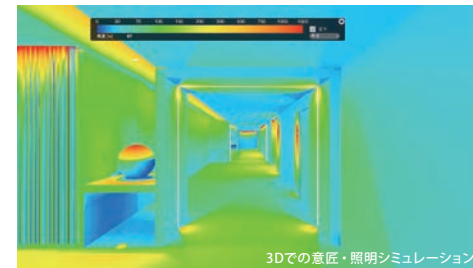
石井:病棟については看護部考案の「河北看護BASEモデル[®]」と呼ばれる看護提供モデルに合わせた空間づくりとしました。37床の病棟を3つの看護チームに分け、チーム毎の看護拠点「BASE」を計画しています。各チームの担当する病室に面する位置に「BASE」を設けることで、看護師の動線を短縮しています。各「BASE」に必要な設備は、看護部と何度も打合せを重ね、患者の近くで看護ができるような設えとしました。

ホテルライクな照明計画

石井:最上階の健診メディカルサロンの計画では、ホテルライクな健診空間を実現する照明計画に取り組みました。3Dでの内装検討と同時に、照度シミュレーションを実施し、建築の納まりと照明器具の品番や設置位置を調整することで、意図通りのライティングを実現しています。意匠設計と電気設計でビジュアルを瞬時に共有しながら進めることができました。



ホテルライクで落ち着いたロビー



3Dでの意匠・照明シミュレーション



健診メディカルサロンラウンジ

(インタビュー: DEW委員 塚原・澤田・寺嶋・川田)

「白い布」が導く、
清浄文化と共創の舞台

花王和歌山研究所 Lifestyle Innovation Center

KAO WAKAYAMA RESEARCH INSTITUTE
: LIFESTYLE INNOVATION CENTER



オープンイノベーションを推進し、
共創を加速する研究所
意匠設計 大内 逸平



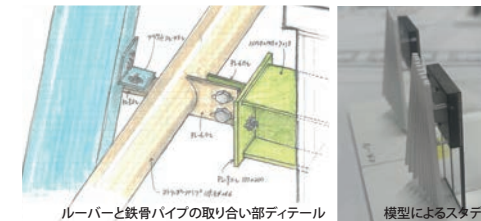
真っ白な布がはたためくデザインを
シンプルな構造計画で実現
構造設計 谷本 満里菜



CASBEE ウェルネスオフィス Sランク取得と、
ZEB Readyを達成
設備設計 原田 千聡



「風にはためく柔らかい布」をイメージした低層部ファサード



ルーバーと鉄骨パイプの取り付け部ディテール



模型によるスタディ



花王製品のシルエットを擬人化



オリジナルのピクトサイン



執務室のリフレッシュラウンジ



共同実験エリア

研究員のウェルビーイングと イノベーションを両立させる空間

和歌山工場に分散していた研究機能を統合し、ファブリックケア、ホームケア、業務用領域における研究開発力の強化と、多様なステークホルダーとの共創加速を実現する拠点として計画しました。単なる機能の集約にとどまらず、共創エリアや実生活空間を再現した評価室、分野を超えて協働できる「大部屋型の執務室・実験室」を設けています。執務エリアでは、研究員が集中とリフレッシュを自在に切り替えられるよう、見通しの良さと多様な居場所をデザインしました。環境性能においてもZEB Readyを達成し、和歌山県内初となる「CASBEE-ウェルネスオフィス」Sランク認証を取得しました。(大内・原田)

白い布、風にふわり

1階には国内外の多様な洗濯機を備えた洗浄センターを配置し、外装は風にはためく白い布を想起させるデザインとしました。目指したのは、単純な材料から有機的な表情をつくり出すことです。長さの異なる直線状のアルミルーバーを上・下2段の地下材に固定するというシンプルな構成を突き詰めることで、軽やかで動きのあるファサードを実現しました。(谷本)

働く人が主役となる舞台を ものづくりとクリエイティブの 共創で実現

徳島信用金庫新本店・本部 TOKUSHIMA SHINKIN BANK NEW HEAD OFFICE / HEADQUARTERS

- 

共創によるひとつひとつ丁寧に
幸せなものづくり

意匠設計 加地 則之
- 

合理的な配置計画で柱のない
大空間を実現

構造設計 嶋田 あゆみ
- 

「阿波農村舞台」を現代に
蘇らせる温かな光演出を実現

電気設計 山形 弥里
- 

快適な全面床染み出し空調を
採用

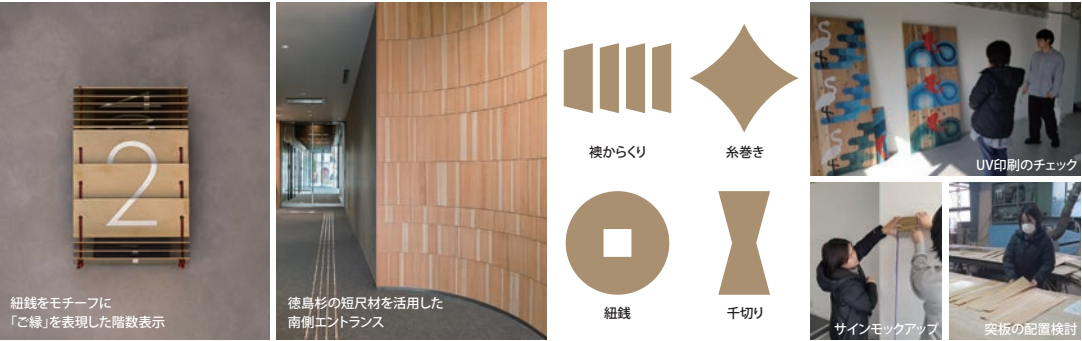
設備設計 都築 弘政



地域文化「阿波農村舞台」に見立てた本店営業窓口



徳島杉で製作したウッドブラインドに徳島の水辺の生き物をプリントし、地域への愛着を感じさせる応接室



働く人が主役となり活躍する舞台

徳島信用金庫の新本店・本部は「一番相談しやすい金融機関を目指そう!」というお客様の中期事業計画に掲げられたスローガンを体現する場として、建築デザインによって働く人と顧客の関係を再構成することに挑んだプロジェクトです。私たちが最優先したのは、そこで働く人々の心身の健康と活力や、地域への愛着を生み出す環境づくり。職員が生き生きと働く姿そのものが顧客の信頼を生み、地域とのより良い関係を築く原動力になると考え、建物を「働く人が主役となり活躍する舞台」と定義し、設計を進めました。(加地)

「千切り型」が紡ぐ、街と人とのつながり

この建築では、人と人をつなぐ象徴として、古くから縁起の良い吉祥文様とされる「千切り(ちぎり・糸巻き)型」をモチーフに選びました。建物の外形からインテリア、サインデザインの細部に至るまで、この「千切り」の幾何学模様を展開しています。企業の核である「地域とのつながり」や「職員同士の結びつき」という目に見えない想いを、建築のデザインを通じて社会へ視覚的に表出させる試みです。(加地)

地域の文脈と、ディテールへのこだわり

インテリアやサイン計画には、さらに深い地域の物語を込めました。徳島市無形民俗文化財である阿波農村舞台の「襖からくり」に着目し、連続する板の構成によって舞台の仕掛けのようなデザインを展開しています。また、「ご縁」を大切にす企業理念を体現するため、五円玉と同じ素材である真鍮を、企業カラーの赤い紐で結ぶサインを考案しました。地域の文脈を丁寧に読み解き、建築の細部へと落とし込んでいます。(加地)

既存杭を避けた配置・平面計画と 動線計画のパズルを解く

DEW: L型敷地や金融機関独特の設計プロセスを教えてください。

加地: 現地調査を行うと敷地南側に既存建屋の大径杭が存置していることが分かり、これを避け建物を北側に寄せた配置としました。外観形状は整形でない交差点に対してどうなじませるかを考え、来店者を招き入れる「千切り型」とし、どちらの道路からも受け止める形状の顔づくりを行いました。

嶋田: 積載荷重が大きい諸室を建物南側に集約することで、建物北側は柱を3本抜いた梁とし、待合ロビーや営業室、大会議室、執務室などの大空間を実現しました。



「千切り型」の外観

加地: 金融機関のセキュリティを確保しながら、本店やATMへの来店者の動線と、本部の役職員、来客の動線を処理するパズルを解くような検討に尽力しました。本部事務室の拡張やセキュリティ等の変更要望もありましたが、お客様と密にやりとりし、計画をまとめました。

阿波農村舞台から着想を得た 営業室・応接エリア

DEW: 営業室を阿波農村舞台に見立てられています、どのように進めましたか。

加地: 一般的な金融機関は、待合スペース側のデザインを充実させてカウンター奥の執務空間が雑然とするイメージですが、ここでは窓口で働く人がバックヤードでなく、主役となり活躍できる空間として、営業室を徳島の伝統文化である「阿波農村舞台」に見立てる計画としました。カウンター上部の水引幕をイメージした布と照明器具を取付ける高さや間隔、待合室側から光源が見えすぎないかをモックアップで検証し、布がきれいに見



待合ロビーでのインタビュー風景



阿波農村舞台をイメージした営業室

えるように工夫しました。

4階は地域の自然をインテリアモチーフとし、応接室には、徳島の水辺に暮らす生き物のイラストをUV印刷した徳島杉のブラインドを設置しました。ブラインドを回転させることで、阿波農村舞台の「襖からくり」のように生き物たちが現れ、3つの応接室に個性と愛着が生まれる空間を実現しました。



しんきんSpace

「いつも」のコミュニティスペースを 「もしも」の避難場所に

加地: 2階のテラスや大会議室の空間は「しんきんSpace」と名づけられ、交差点からもよく見えるため、日常は地域に開放して展示や講演などに利用してもらいます。災害時にはその場所が一時避難場所として活用できるフェーズフリー（非常時を起点にした機能を備えるのではなく、日常を豊かにする延長として非常時にも役立つ機能を備えていることの意味）の計画としました。気軽に上がってもらえるように設けた屋外階段で、水害時には2階に直接避難することができます。8月に徳島市で行われる阿波踊りの前には、しんきんSpaceの大型鏡で練習する姿もあったと聞いています。

お客様のことを本気で考える仕事の姿勢で 地域の新しいランドマークを創出

お客様: 竣工後、来店者や地域の方々、役職員から大変好意的な声をいただいています。外観は夜に富田橋方面から見たときの金庫名のサインがとても美しく、この界限ではこれまでになかった雰囲気があり、地域の新しいランドマークのようだとお褒めいただきました。また、徳島らしさを取り入れた内装についても非常に好評です。各所に用いられている「千切り」の模様は「かわいらしい」「印象に

残る」とよくお聞きしますし、農村舞台をモチーフにした水引幕も「通常の金融機関の窓口とは違う、徳島らしい雰囲気を感じる」とご評価いただいています。設計担当の方々が地元の人でも詳しく知らないような徳島の伝統的な場所まで実際に見に行かれたと聞き、この建物を金融機関の本店としてではなく、地域性や文化をどう表現するかという視点で真剣に考えてくれたことに、大変感銘を受けました。

DEW
松浦 遼DEW
澤田 郁実構造設計
嶋田 あゆみDEW
見角 彩楓DEW
阿部 香穂里

理事長

意匠設計
加地 則之

(インタビュー: DEW委員 見角、松浦、澤田、阿部、南川)

計画の過程そのものを
「創発」の起点へと変えていく
研究者との対話を通した
新たな設計プロセス

住友重機械工業横須賀製造所
技術研究・創発棟 Cs'-Lab+
Sumitomo Heavy Industries Yokosuka Innovation Hub, Cs'-Lab+



研究者参加型の設計プロセスで
お客様の想いを最大化する
意匠設計 小玉 欽也

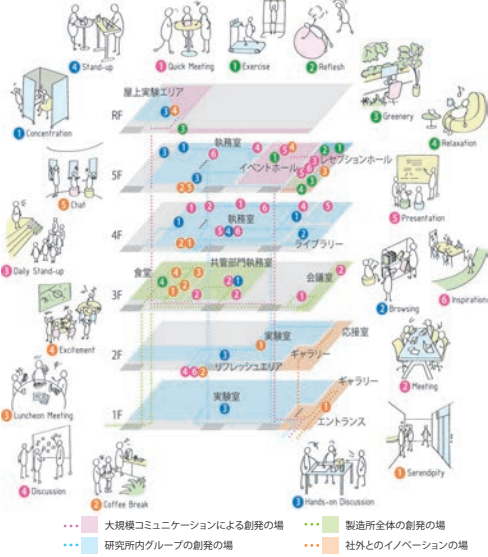


研究者との対話を通して
働き方から空間をデザイン
ワークプレイス・FMコンサル 渡會 実穂



異分野が交わり、
新たな価値が芽吹く
インテリア設計 赤澤 知也 (F4)

F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



「創発」につながる多様なアクティビティと4つの場



女性をはじめとした多様な研究者が働きやすい環境を考える



ワークショップの様子



モアレの検証



執務フロアを縦に繋ぐ階段では基壇部でのディスカッションや踊場での視線の交わりなど偶発的な創発を誘発



組織内外の協働を促進するレセプションラウンジ



食を通じた交流や日中の打合せでチームビルディングを促す食堂



リフレッシュを促し、新たな発想が生まれる場



ゲストを迎えるキッチンは、シーンに応じてオープンな発表の場に変化

対話による新たな設計プロセス

住友重機械工業における分野の異なる研究者同士の「創発」を促すイノベーション拠点。多様な実験設備・研究機能に加え、ラウンジ、ギャラリー、イベントホール等の交流機能を計画しました。(小玉)
設計段階から研究者や各部門の担当者も参加するプロセスとすることで、建設プロジェクト自体を社内の「創発」を生み出す契機としました。(渡會)

働き方から空間をデザインする

部門横断の研究者とのワークショップを通して、研究者の創造的な働き方を促進するアクティビティについて議論しました。それらの活動が場の特性に合わせて随所で自然と生まれるように、建物全体を偶発的な対話や技術交流を促す舞台として計画しました。(渡會)
人と人、技術と発想が噛み合うことで「創発」を生み出すことを空間で表現しました。
エントランスでは、多様な技術が重なり合い、新たな価値を「創発」する姿を、カーテンが生み出すモアレ現象と偏光フィルムによって表現。人の動きや視点によって表情が移ろう、創造性を象徴する印象的な空間としました。(赤澤)

都心の3敷地をつなぎ 「動」と「静」を内包する 1つのキャンパス

品川女子学院 A・B・C棟 SHINAGAWA JOSHI GAKUIN



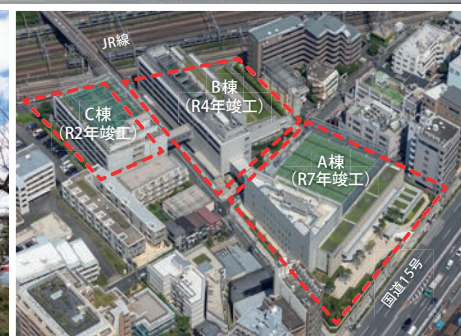
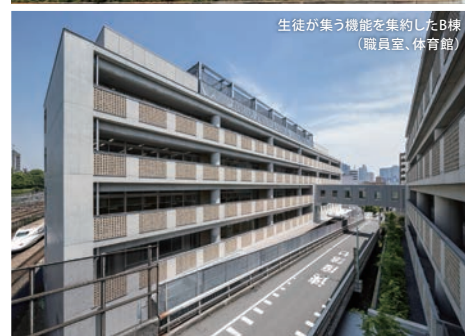
新しい価値を生み出した
キャンパス全体計画
意匠設計 日野 哲也



シミュレーションにより
最適化した講堂デザイン
意匠設計 佐原 あい



学院の未来をともに描いた
協働プロジェクト
意匠設計 岡野 晶



全体計画 都心の3敷地をつなぎ、ONE CAMPUS PROJECT

本計画は、都心の3敷地にまたがり、6年半にわたって「居ながら」でスクラップアンドビルドを繰り返す、難度の高い計画でした。「社会に貢献する女性を育てる」を目標に掲げる学院にふさわしいキャンパスを実現するため、お客様や生徒の皆さんとともに課題に取り組み、学院の100年にわたる伝統を継承しながら、機能的な建物配置による教育活動の連携強化や多目的に使える講堂機能、学院の伝統と思いを紡ぐ校舎の実現など、新たな価値を付加することにこだわって創り上げました。

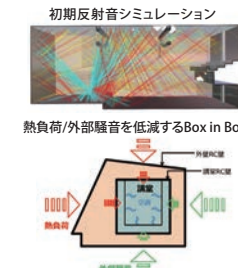
学院の正面となる国道15号側から奥へ進むにつれて、活動を生み出すパブリック機能から、静寂を必要とするプライベート機能へと、グラデーションを描くように用途が変化していく構成とし、それぞれの敷地の特性に応じた機能配置としました。また、計画地にある7mの高低差を生かし、各校舎を上空および地下の連絡通路で接続することで、道路を横断することなく校舎間を移動できる動線を確保しました。これらは、生徒の安全でスムーズな移動や教育活動における連携強化を生み、キャンパスとしての一体感に寄与しています。(日野)



講堂 環境設計/音響設計 品女のアクティビティを最大化させる1000人大講堂

講堂が直接外壁に面しない「Box in Box」の平面構成を採用することで、外部の騒音や外気熱の影響を受けにくい環境を実現しました。これにより、静かな音環境の確保と空調負荷の低減を両立しています。また構造体を表しとすることで天井高さを最大限確保し、空間

全体のダイナミズムを創出しました。更に、天井スラブに表しの躯体を反射材として機能させ、講堂の隅々まで音を届けることで、音環境の向上にも貢献しています。加えて、シミュレーションツールを最大限に活用し、音響と視線の検証を繰り返すことで、最適な形状と座席配置を導き出しました。(佐原)



協働プロジェクト 伝統と思いを紡ぐ共創で愛着と価値を創出

品川女子学院の先生・生徒とのコラボレーションにより、未来の生徒たちへつなぐメッセージを、カフェテリアのインテリアと外構に込めました。これからの使い方を共に考え、「社会に貢献する女性を育てる」を実践できる場を計画しました。インテリアでは、プレゼンテーションなどに活用できる家具を中心に場のあり方をデザインし、外構では、学院とゆかりの深い世界各地の物語を表現した植栽選定や配置、サインをデザインしました。将来のメンテナンスも見据え、生徒たちの手で受け継ぎ育てていくことで、学院の伝統と思いを紡ぎ、愛着のわく場を目指しました。(岡野)



都市と交感する レジデンシャル・ラグジュアリー

フェアモント東京 FAIRMONT TOKYO



大都市の躍動をゲストの体験に
織り込む空間づくり
意匠設計 清水 壮輔



ラグジュアリーホテルの世界観が
凝縮された35階の作り込み
意匠設計 新谷 佑磨



眺望を最大限に生かした
特別客室のデザイン
意匠設計 高木 りさ



35階ロビーラウンジ「VUE MER」



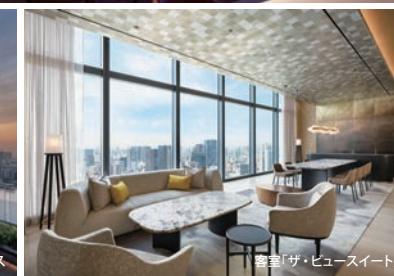
ロビーラウンジからの夜景。テラスの水盤の先に東京の風景を望む



レストラン「DRIFTWOOD」



東京湾を望むテラス



客室「サ・ヒュースイート」

大都市の躍動を空間に織り込む

BLUE FRONT SHIBAURA TOWER Sの高層階を構成する、日本初進出のラグジュアリーホテルブランド、フェアモント東京。東京の壮大なパノラマを、空間や素材の分節と結合が生むインテリアの豊かなシーンに織り込み、ゲストに落ち着きと高揚の場を提供します。4階、35階、43階のテラスは、都市を眺める視点の高さや、植栽、水盤との関係を一体的に調整し、大都市の躍動をゲストの体験にダイレクトに結びました。

レジデンシャルな落ち着きの中に、東京を構成する湾、都市、川、空、山の諸相が心象風景として重なる空間を意図しました。（清水）

ホテルづくりの総合プロデュース

当社として初となるホテルのプロジェクト・マネージャーに取り組み、オーナーズコンサルとして、ホテルづくりの総合的なプロデュースを行いました。設計・コンサルティングメンバーの組成や、どのような客室やパブリックスペースをつくり、どう運営するか、といった根幹から、家具・什器・アート・サインなどの監修に至るまで、事業者様やホテルブランドとともにホテルづくりに取り組みました。（清水）

「Edo Eco Standard」 江戸文化と環境技術の融合

Hi-gs 日本橋 Hi-gs NIHONBASHI



アイデンティティを継承する
「粋」なビル

意匠設計 南川 大輔



共用部空間のコンセプトは
「小紋【co-mmon】スペース」

意匠設計 藤田 倫也



既存躯体の本設利用により
工期短縮・コスト削減を実現

構造設計 中谷 亮太



ハイスペックかつ省エネを
実現し、リーシングに貢献

設備設計 荻原 隆太郎



立地に適した高い環境性能と
BCP性能を実現

電気設計 道 洸介



光に照らされたファブリックガラスによって
来館者をエレベーターホールへ導くエントランスホール



伝統的な小紋柄を持つバターンや
町家街の小路のイメージを取り入れた基準階エレベーターホール



大通りに呼応して面を作り、端部のガラスをはね出したコーナー部ディテール



大通り・交差点が望める、明るく開放的なテナント専有部



BIMと点群の重ね合わせ

BIMと点群の差分赤青表示

メタバース検査 BIMと現場点群データが一致する部分を青色表示させて確認

江戸の美意識と環境配慮を融合し、 新たな価値を創出

「Hi-gs（ハイジス）日本橋」は東日本銀行旧本店ビル（当社設計施工）の建替プロジェクトです。設計にあたっては、東日本銀行のアイデンティティを継承し、日本橋の立地特性を活かしたビルを目指しました。

江戸の美意識（Edo Standard）と環境配慮（Eco）を融合させた「Edo Eco Standard」をコンセプトとして計画しました。環境認証としてCASBEE-建築（新築）Sランク、ZEB Readyを取得しています。外装の3面カーテンウォールは、交差点に向けた正面性を確保しつつ、2つの大通りの都市景観との連続性を重視しました。（南川）

事業主の個性を内包する内装デザイン

エントランスのファブリックガラスには事業主のロゴをモチーフとしたオリジナル小紋柄を設えました。基準階エレベーターホールのアクセント壁の「縞」は建築主や関係者の手で施工していただき、唯一無二の小紋柄として建物に愛着を持つ機会を創出しました。（藤田）

設計初期段階からBIMをフル活用

事務用途では当社初のBIMモデルによる確認申請の事前協議を実施し、また配筋検査や消防検査等の一部をメタバースで行う技術検証も行いました。（藤田）

「住もう喜び well-being」を
感じる木質の住まい

プライマル品川大井町

Primal Shinagawa Oimachi



都市における木造住宅の
新たな在り方を考える

意匠設計 富安 達朗



木を魅せ、永く美しく保つ
ディテールの追求

意匠設計 紺世 裕子



木質の魅力を街に伝える
サイン計画

意匠設計 日下部 春花



ひとつずつ積み重ねた
RC×木質建築

構造設計 有馬 真輝



見せる木質構造に挑戦
自分が住みたいです

構造設計 石原 滯



木質空間を活かす設備設計

設備設計 池松 由良



木質を魅せる照明計画

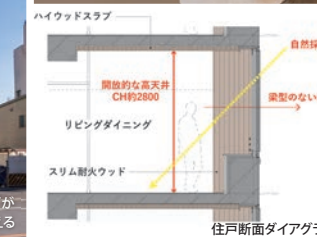
電気設計 内田 慎太郎



住戸内からバルコニーの軒天へ連続したハイウッドスラブが
都心の街並みに対し木の温もりを伝える



約2.8mの天然木天井とハイサッシがもたらす、開放的な眺望と心地よい居住空間



住戸断面ダイアグラム



家族見学会での様子



高い軒天を最大限に使った迫力のあるエントランスゲート



巾木や通気口など適所にスチールを組み合わせ、
デザイン性と屋外での木の耐久性を両立



スリム耐火ウッドとハイウッドスラブによる
木の温もりに包まれる主寝室

天然木に囲まれた well-beingな住まいの実現

木を身近に感じる温かく健康的な生活空間を目指し、『住もう喜びwell-being』を感じる木質の住まい』をコンセプトに掲げました。構造体や仕上材には、耐火木質柱「スリム耐火ウッド®」や、CLTを型枠兼仕上材として活用する「ハイウッドスラブ」を採用し、天然木に囲まれた住空間を実現しています。住戸内は、賃貸マンションとしての耐久性を考慮し、居住者の手が触れにくい天井や雨がかりの少ない軒天を中心に木質化しています。天井の木質化にはハイウッドスラブを用い、天然木による直天井空間を実現し、木の温かみを最大限に感じられる天井高約8mの開放的な高天井空間を創出しました。(富安)

設備計画は、天井内のダクトや配線を部屋の内側や壁際に集約し、開口部まわりのCLT直天井を広く整形に確保することで、開放感のある居室空間づくりに寄与しました。(池松・内田) (※CLT：直交集成板)

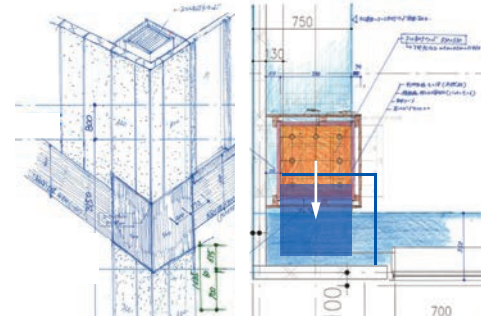
都市における木質集合住宅

外周は逆梁とすることで、梁型のない天井までのハイサッシを実現しています。自然光に柔らかく照らされた木の天井が、バルコニーの軒天へと連続し、街行く人たちにも木質建築の心地よさを伝え、都市における木質集合住宅の新たな価値を提示しました。木の温もりや空間の心地よさ等の魅力が居住者に評価され、環境配慮と良好な住み心地を両立した住まいとして、都市生活における新たな選択肢となり、確かな支持を得ています。(富安)

新フロントローディングの効果と チームでのプロジェクト推進

富安：新フロントローディングの一環として、東京支店建築部・設備部・生産計画部・生産技術本部・設計本部のメンバーが集まり、木質架構部分の深掘りや、他木質案件からのフィードバック反映、BIM360による整合調整、現場検図の前倒し等を行いました。

見積前に施工検討・計画反映や社内合意形成を図ることで、木質架構はもちろん、計画全体の合理化、お客様とのコスト調整が円滑に進んだと思います。スリム耐火ウッドの施工合理化やハイウッドスラブのノロ止め・木表し部分のきれいさは、まさに新フロントローディングの効果だと思います。



新フロントローディングで施工方法を含め納まり検討を行った

松本(木質推進部)：スリム耐火ウッドは、早期に施工方法を検討し、接合部をPC(プレキャストコンクリート)から現場打設へ変更しました。また、クレーンの吊り上げ荷重を事前に確認し、CLTの割付を1住戸2～3枚としました。CLTとコンクリートの密着性については、生産技術本部から他案件の事例を共有し、ラグスクリューボルトのピッチを設計内協議の上で決定しました。



スリム耐火ウッドとハイウッドスラブの施工風景



住戸リビング

賃貸マンション木質化の実現へ

富安：リビング・ダイニングや主寝室を豊かな木質空間とすることを最初に考えました。賃貸マンションという特性上、手に触れにくい天井面を中心に木質化を図りました。結果として、木を感じ、かつ開放感に溢れる、非常に心地よい住まいができたことに喜びを感じています。

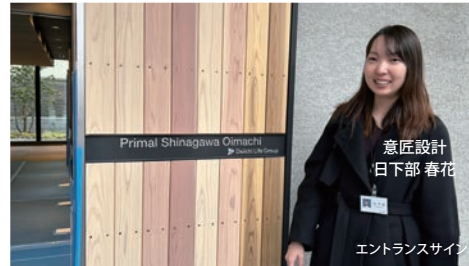
松本：柱はカラマツ集成材、CLTはスギを採用しました。木材は意匠性に優れる一方、日焼けや傷、メンテナンスが課題となります。この点を関係者で十分に議論し、天井面は天然木のCLTとする一方で、壁面には耐久性のある木質建材を採用しました。技術研究所と連携し、耐火被覆の現場施工や、ボードとRCの取り合い部など、細かい納まりについても検討しました。



スリム耐火ウッド

若手の取り組み

日下部：館名サインは、上職者にご指導いただきながら、プレゼンを行いました。グループサインを入れたいというお客様のご要望に対して、何度も案を修正し合意へと繋げました。デザイン決定後は、サイン業者さんと打合せを重ね、施工手順や将来のメンテナンスまで考慮し、デザインが形になるまでを丁寧に追求しました。



エントランスサイン

紺世：各階の階数表示には、CLTの端材を用いたサインを採用しています。CLTの積層面が美しく見えるよう、端材から加工可能な寸法や線の太さをサイン業者さんと話し合い決定しました。その他にも、エントランスホールにはCLTのアップサイクル活用として、CLTゲートや集合玄関機周りの装飾を設けています。ハイウッドスラブに用いている

CLTの迫力を感じてもらえるよう、厚みや木目を大きな部材で魅せるデザインとしました。CLTは工場加工のため、取り合う機器の交換方法、重量のあるCLTの支持方法、コーナーガードや巾木の納まりなど、細かい部分についても現場で構造・設備と丁寧に検討を進めました。



エントランスホール・CLTゲート

竣工後の声

富安：工事監理段階だったと思いますが、お客様が今回の計画建物を作品と呼んで下さるようになったのは嬉しかったです。

紺世：完成間際には、現場で街の方々に声をかけていただく機会が非常に多かったです。設計段階で「街の新しい木質建築」となるために取り組んだ工夫が、

少しずつ地域の方々に認められていく姿を見て、とても嬉しく感じました。お客様からは、高い天井やハイサッシによる開放的なリビング、そして端正な外観について高く評価していただくことが多かったです。細かい納まりの追求はもちろん大切ですが、デザインの骨格となる分かりやすいコンセプトが、最終的なお客様の満足や評価に繋がるのだと改めて実感しました。

松本：木の温もりや空間の心地よさ等の魅力が居住者に評価され、関係者一同、非常に喜ばしい成果として受け止めています。また、社内外の見学会においても、国産材を積極的に活用し、全居室でCLTの表し天井を実現した点が高く評価されています。



RCと木のコントラストによる端正な外観

(インタビュー：DEW委員 遠藤、今村、澤田、塚原、三上、石田)

海岸線の記憶を紡ぐ 次世代オフィスビル

ミタマチテラス MITAMACHI TERRACE



土地の歴史と今をつなぐ
スマートビル

意匠設計 櫻田 留奈



次世代オフィスビルを支える
レジリエンスと安心の実現

構造設計 榎窪 研太



ユーザー目線で実現する
機械設備最適解への挑戦

設備設計 甲嶋 秀平

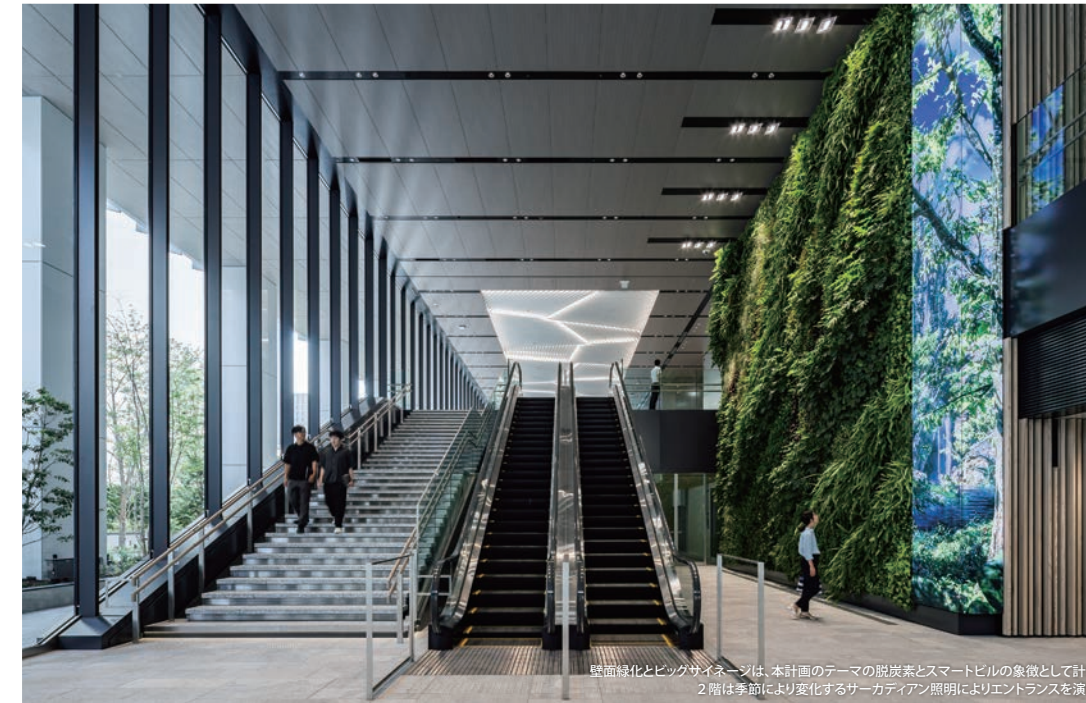


人と街をつなぐ
照明計画の実現

電気設計 小林 逸人



南側全景 ダブルスキンカーテンウォールにより、環境性能と快適性能の両立を実現



壁面緑化とビッグサインは、本計画のテーマの象徴として計画
2階は季節により変化するサーカディアン照明によりエントランスを演出



海岸線の記憶をつなぐ“岩礁”がコンセプトのランドスケープ



1階 ELVホール 正面の壁は特殊塗装



お客様・現場・営業・設計での竣工時の集合写真
上から見るとミタマチテラスの頭文字 MTが...

「海岸の記憶」をデザインコンセプトに

第一京浜を境に、かつて海と陸の境目であった計画地。土地の歴史と今をつなぐ「海岸線の記憶」をデザインコンセプトとして、ランドスケープ、エントランスなど各所に展開しました。1階エレベーターホールの特殊塗装では、自ら下絵を作成し、職人さんと何度も打合せを重ねました。現地で照明を当てながら艶やグラデーションを緻密に調整することで、設計施工ならではのこだわりの空間を実現しました。（櫻田）

ハード・ソフト両面で実現するレジリエンス

制振構造によるJSCA上級相当の耐震性能と、地震後の健全性を即時評価・通知する「安震モニタリングシステム」により、ハード・ソフトの両面から高いレジリエンスと安心を実現しています。（榎窪）

建築・設備が繋がり、真の利便性と快適性を 追求したスマートビル

建物運用デジタル化プラットフォーム「DX-Core」を中核としたスマートビルの実現に向け、設備単体の動作はもちろんのこと、空調・照明・入退設備の連携や建物ポータルサイトを用いた運用の一元化等により、利便性や快適性の向上を追求しました。検討過程では、ユーザーの様々な運用パターンをシミュレーションし、各プロパー間で何度も調整を重ねました。その中で、設計者として「ユーザー目線に立った設計」の重要性を再認識しました。（甲嶋・小林）

街なかに佇む コンクリート主役の スモールオフィス

高山商事株式会社 本社 TAKAYAMA SHOJI CO., LTD. HEAD OFFICE



想いを形に
ものづくりの本質を空間へ
意匠設計 井野 裕也



壁式RC造を造りこみ
スクエアで明快な空間を実現
構造設計 宮倉 周平



建築と設備を一体で解く
快適とエコのベストバランス
設備設計 成田 政杜



光で導く階段と青空照明が彩る
開放感あふれる空間創り
電気設計 澁谷 明広



本実型枠コンクリート打放しと対比させた杉板本実型枠の内装材



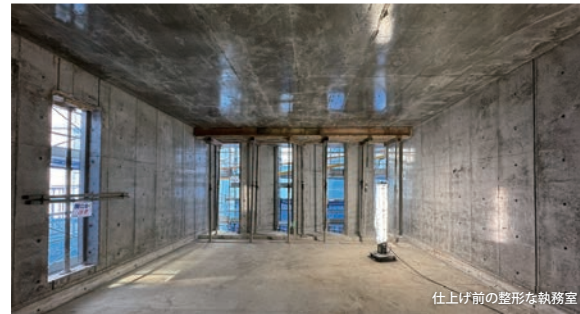
RC壁式構造・ボイドスラブ・全面床吹き出し空調による柱梁型のない執務室



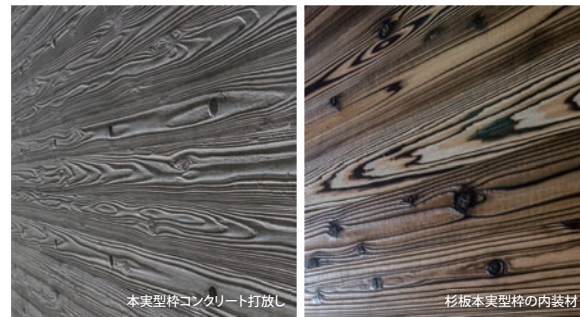
造作手摺と人を導く柔らかな光のライン



ボイドスラブと埋設配管

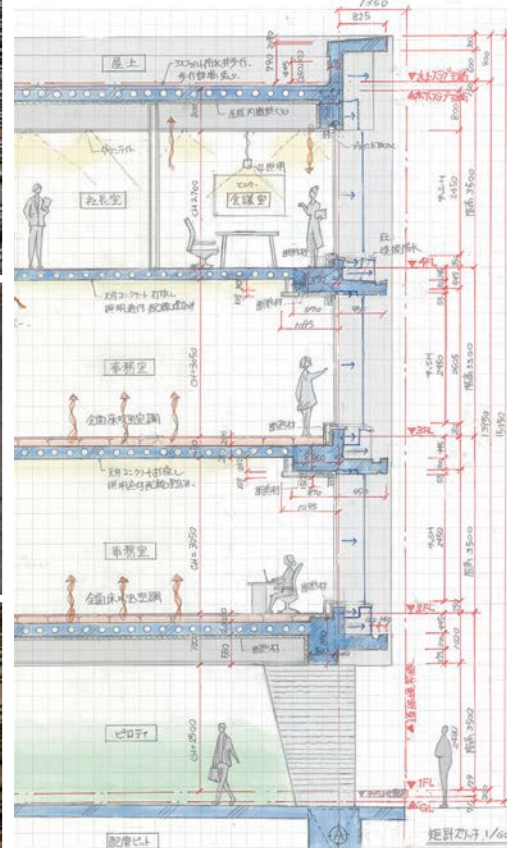


仕上げ前の整形な執務室



本実型枠コンクリート打放し

杉板本実型枠の内装材



矩計スケッチ検討

密集市街地で執務空間を最大限確保

東北を拠点とする建設資材商社である高山商事の創立60周年記念本社ビル建替えプロジェクトです。仙台駅前の密集市街地において執務空間を最大限確保するため、RC壁式構造を採用し、コアを集約しました。

さらに、ボイドスラブや床吹き出し空調も採用することで、柱梁のない天井の開放感と地震時の安全性を両立した執務空間としました。また、RC造の採用により夜間工事を回避しつつ、鉄骨造同等の工期を実現しました。これは密集市街地でのオフィス建築の一つの解となると考えています。

機能性と象徴性を兼ね備えたファサード

ファサードはRCルーバーを各階で角度を変えて配置し、開口率を調整することで2・3階事務室では視線と反射光を遮蔽し、4階会議室では眺望を確保しています。真っ白なRCルーバーは高山商事の社章である鷲の翼をモチーフにしており、階を上ることに広がっていくことで企業の飛躍と発展を表現しています。

本実型枠コンクリート打放し

エントランスでは、本実型枠コンクリート打放しと、その杉板本実型枠を対比的に内装に用い、来客者に「ものづくり」のプロセスに触れてもらえる空間を創出しました。クライアントの「ものづくり」への想いに、私たちも建築という「ものづくり」で応えました。(井野)

ものづくり企業への共鳴

井野：お客様の高山商事は、建設資材を扱う商社で、ものづくりのプロフェッショナルです。創立60周年を記念する本社ビルとして、従業員の皆様の働き方に寄り添った計画が求められました。私たち設計チームは、同じく建築という「ものづくり」で真摯に応えたいという強い想いがありました。意匠・構造・設備の設計チームに加え、現業、営業、見積、調達の支店メンバー、さらには技術研究所も一丸となって、細部の計画までこだわりました。

ピロティ空間の壁柱には杉板本実型枠によるコンクリート打放しを採用し、超撥水材塗布による「アート型枠化」で美しい木目を転写しました。



技術研究所と連携し、モックアップ作成や職人へのレクチャーを実施することで、イメージの解像度を合わせ、円滑な工事監理を実施しました。エントランス内部には杉板型枠を内装材として活用し、来客者に「ものづくり」の工程を感じていただける空間としました。

意匠・構造・設備・施工が融合した空間

DEW：どのようなプロセスで設計が進んでいったのですか？

宮倉：最も重要なテーマは、執務スペースの最大化と、安心・安全で快適なワークプレイスの実現でした。初期段階から施工担当者と協議を重ね、鉄骨造（ラーメン構造・ブレース構造）、RC造（ラーメン構造・耐震壁付きラーメン構造・壁式構造）に加え、免震構造まで幅広い検討を行いました。その結果、意匠計画・施工計画・コストの3つの観点から最適解と判断したのが壁式RC構造です。この選択により、高い耐震性能を確保しながら室内に柱型・梁型が現れないスクエアで明快な空間を生み出し、執務スペースの最大化を実現しています。このようなプロセスを丁寧に積み重ねることで、お客様にとって最も価値



ある空間を確かな根拠とともに提案することができました。

成田：東日本大震災での天井落下被害事例も踏まえ、空調は床吹き出し形式、照明はスラブ埋込み形式を提案し、従業員の皆様が安心して働ける安全で圧迫感のない天井レスな空間を実現しました。床吹き出し空調は下階がピロティとなる2階執務室の底冷え対策にもなっており、省エネルギーな計画となっています。

澁谷：照明や感知器などの配線を躯体に埋め込むため、設計段階からボイドスラブのボイドと配線ルートの調整を行いました。最終的には配管の共用を行うことで、スッキリとした空間を実現しています。



DEW：特徴的なファサードはどのように決まったのですか。

井野：向かいのビルからの反射光や視線を遮りつつ見晴らしを確保したいという、相反する要望がありました。華美な装飾を排したいというご意向に対し、ルーバーを後付けせず、RC躯体そのものをルーバー状に構成する手法を提案しました。各階で角度を変えて開口率を調整し、2・3階の事務室では視線と反射光を遮蔽、4階の会議室では眺望を確保しています。納まりの検討では何度もスケッチを描き、意匠と構造で調整を重ねて美しさと合理性を両立させました。外装デザインや色彩の決定は、3Dパースや大判サンプルを用いた屋外での色確認を経て決定していきました。

電力の引き込みは設備部や専門工事業者との調整を行い、できるだけ目立たない外壁からの引き込みとしました。

DEW：照明計画で意識した所を教えてください。

澁谷：都市型敷地の中でも、エリアごとの雰囲気づくりを感じる照明計画としています。階段室では木手摺に照明を仕込み、来客者を上階へ導く光の演出を施しています。また、吹き抜け上部には、メンテナンスフリーで漏水リスクのない「青空照明」を設置。高層ビルに囲まれ、自然光が入りにくいという立地に対し、トップライトと見間違ふほどの明るさと開放感を実現しました。

DEW：支店だからこそできた、と感じることはありますか。

井野：支店では、営業、設計、設備、見積、現場といった各部門の距離がとても近く、部署の垣根を越えて気軽に相談し合える環境があります。本建物は密集市街地という条件だったため、設計の初期段階から「施工性、工期、コストを最適化しながら、どうすれば良い空間が実現できるか」について施工担当者と膝を突き合わせて話し合えたことが、プロジェクトをうまく進める大きな力になりました。設計と施工が早い段階から一体となって検討を深めることの楽しさと大切さを改めて実感しました。この

経験は、これからの設計の仕事への大きな自信になっています。



（インタビュー：DEW委員 南川、小土井、澤田、小川）

学校の起源、歴史を
直感的に認識できる
力強い陰影を纏った形

東大寺学園第二体育館 菁々館 Todaijigakuen Junior & Senior High School Seiseikan



伸びやかな庇、外壁、素材の
凹凸がもたらす陰影の追求
意匠設計 安田 翔太



軽快な鉄骨フレームで魅せる
無柱空間
構造設計 松井 秀平



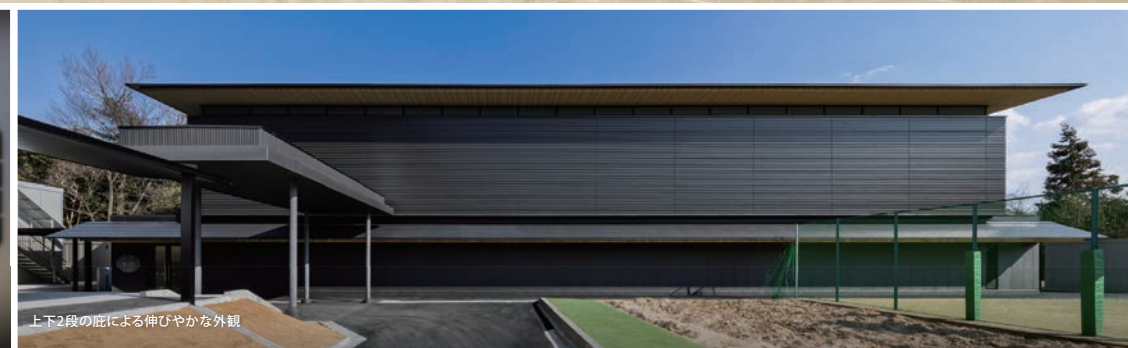
ZEB Ready認証を取得
次世代へつなぐ体育館
設備設計 石井 卓哉



競技に集中できる
視環境の実現
電気設計 角田 祥梧



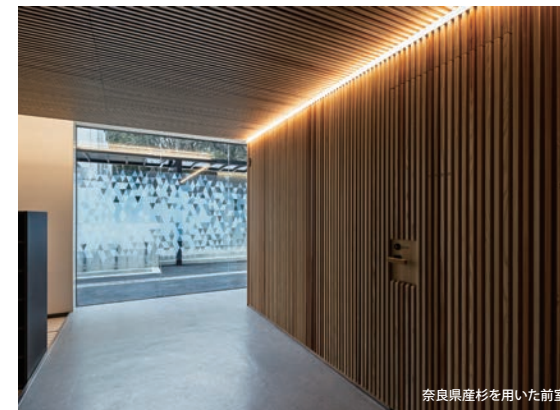
瓦を使用した館名サイン



上下2段の庇による伸びやかな外観



エントランス外観



奈良県産杉を用いた前室



競技に集中できるように上部水平窓から間接光を取り入れたアリーナ

学校の起源・歴史を感じながら競技に最大限集中し研鑽を積むことができる体育館

華嚴宗大本山東大寺が運営する中高一貫校の体育館増築計画。皆が集い互いに高め合える場＝体育の伽藍をコンセプトに、体育施設の機能を満たした上で、建物全体を通じて学校の起源、歴史を直感的に認識できる力強い陰影を纏った象徴性の獲得を目指しました。アプローチ、エントランス空間は奈良県産杉を用いた軒及びリブ壁とし、華嚴宗

の世界観を具現化した瓦を敷き詰めた館名サインによって伝統を感じながら、自然素材の温かみによって競技前の心を整える空間として計画しました。深い庇とハイサイドライトによって直射光を抑制しつつ安定した自然光を採り入れ、競技に最大限集中し、研鑽を積むための体育館をデザインしました。（安田）

100周年事業にふさわしい 象徴性のある体育館

DEW：東大寺諸施設に何度も足を運びイメージを収集されたと聞きましたが、どのような視点でイメージを収集されたのでしょうか。

安田：計画初期段階でまずフラットにイメージを得るため、次に体育館の大スパン架構をいかに実現させるかという目線で、東大寺境内を見て回りました。その後、体育館ボリュームをいかにデザインするか、庇と木架構との関係性、先端納まり、サインモチーフのデザイン収集など、お客様である東大寺住職の常任理事にもご案内いただきイメージ収集とリサーチを実施しました。



世界最大級の木造建築や造形には訪れるたびに圧倒され、その真似をしているだけでは偽物にしかないことを痛感させられました。そこで、いかに洗練させて新しい形を提示できるかという方向性を定めました。

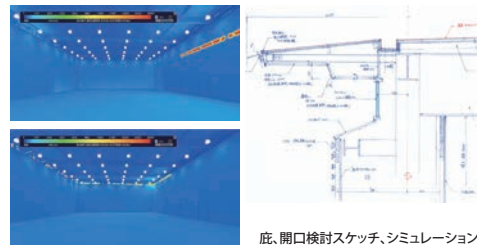
DEW：軒先のデザインに尽力されたとのことですが、どのように検討されたのでしょうか。

安田：庇を構成する屋根と軒裏の木架構の構成を踏襲しながら洗練させることに注力しました。金属屋根メーカーに早期から設計協力していただき、先端の見付け寸法を極限まで薄く見せることを目指し、軒の木仕上については東大寺の持ち送り構造とするのではなく、木の矩形として厚みを持たせて構成し、金属屋根先端とのバランスを見ながら見付け寸法等を設定しました。

限られた構成要素を活かして コンセプトを実現する

DEW：限られた条件のなかでのデザインに試行錯誤されたと伺いましたが、どのように乗り越えたのでしょうか。

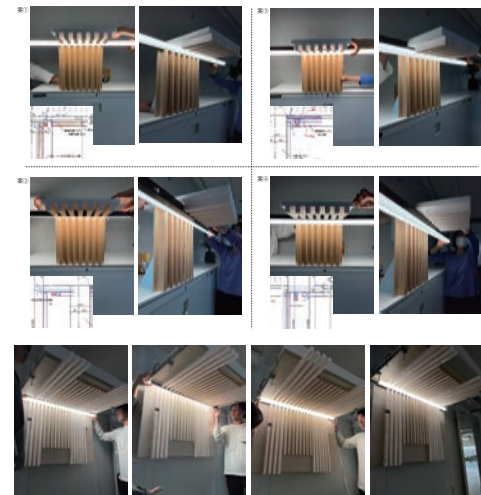
安田：要求諸室が少なく構成要素に限りがあるため、その中でいかにコンセプトを実現させつつ体育館機能を満たせるか検討しました。既存校舎から雨に打たれずにアクセスする連絡通路が必要という追加要望を受けて、庇という要素が付与され、建物上部にも庇を設け根元に開口を設けることで、日射を抑制しながら彫の深い陰影を纏った外観を構成することができました。日射シミュレーションを実施し、競技に影響する直接日射がないように開口形状と庇深さを決定しています。



庇、開口検討スケッチ、シミュレーション

DEW：外観は黒を基調としていますが、屋内は木材を多く使った明るい印象です。

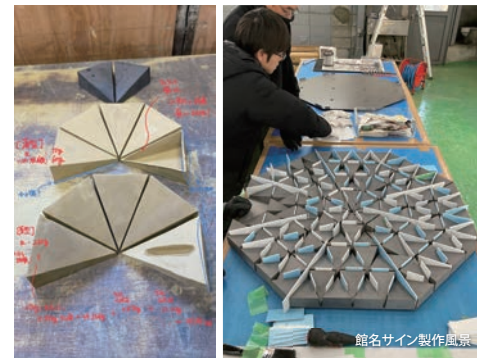
安田：既存校舎と関係を持たせつつ新しい象徴的なイメージとするため、既存校舎の瓦に近似した色を外壁色に設定しました。その分、内部は明るい印象にしたかったこともあり、木の仕上を内部エントランスまで引き込んだ構成としています。木の仕上に設置する照明の向き・取付方法も模型や現寸モックアップを作成して確認し、木のリブがきれいに見える計画を実現しました。



照明モックアップ検討

DEW：建物サインが印象的ですが、サイン計画のプロセスでこだわった点はありますか。

安田：サインデザイナーのhokkyoklにご参画いただきデザイン検討しました。仏教の基本修行である八正道と、華嚴宗を象徴する蓮の花から、「八角形」を軸に展開し、小さな瓦のピースが八方向へ広がりながら集合しているデザインにより、心身の成長や、互いに結びついた関係性を表し、東大寺創建の精神「生あるものすべてがともに生き、支え合う」を体現することを目指しました。校舎内で多用されている瓦を用いることで既存校舎とのつながりも感じられるように心がけています。実現にあたっては瓦の製作工場とサイン施工業者との調整を入念に重ねて実現に至りました。



設計責任者として 一気通貫で案件に携わる

DEW：今回のプロジェクトを通して、成長したこと、身についたことはありますか。

安田：設計責任者として意匠検討、社内関連部署や行政との調整、計画の方向性についてお客様と対話し、企画段階から竣工までプロジェクトを統括・推進できました。お客様にもご同行いただき神戸方面にホール・体育館の視察を行い、体育館について学ぶ機会を得たこともよい経験となりました。本計画に対する思い、柔軟な姿勢、先生方の熱意を受け、建物がよくなる条件の1つに、お客様の姿勢が重要であると改めて感じました。



(インタビュー：DEW委員 南川、阿部、松浦、高木、今村)

守り継承し繋ぐ

國學院大學神殿造替

KOKUGAKUIN UNIVERSITY SHRINE RECONSTRUCTION



神道を実践する場を未来に繋ぐ

意匠設計 福本 敦子



神殿と森の調和を実現

意匠設計 柿澤 英之



開放的な伝統空間を再構築

構造設計 木村 誠



周辺の森に溶け込む神殿

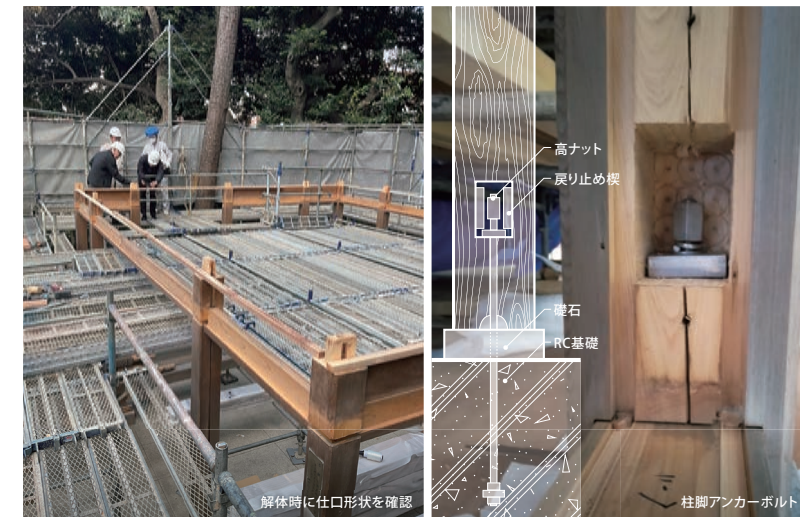
國學院大學創立140周年記念事業の一環として行われた、渋谷キャンパスの神殿造替プロジェクトです。明治神宮より御仮殿の解体部材を譲り受けることが決まり、新たな本殿として造替する再整備計画が始まりました。

まずは神域の全体構成計画を検討しました。神殿の軸線は既存の構成に倣い、本殿・幣殿・拝殿・鳥居を一直線上に配置。また、既存樹木は極力伐採しないように、建物位置を決定することで、周辺の森に建物が溶け込むようにしました。本殿は、再構築する拝殿・幣殿とのバランスや屋根の重なりを考慮し、新たに基壇を設けて床高さを上げることで、神聖な場を表現しています。(柿澤)

伝統木造建築における現代構造補強の実践

拝殿、幣殿は、伊勢神宮より譲り受けた式年遷宮の古材を用いて平成7年に造営された建物であり、柱が細く壁の少ない開放的な造りでした。解体・移築にあたっては、木部材の健全性を確認し、化粧材は全て再利用しました。構造計画では、現行基準に適合させるため、構造実験により定量的な評価を行ったアンカーボルト補強を採用しています。また、腰壁は既存の枅材を活かして面材を入れ耐震壁とし、見え掛かりに配慮した火打ち材も追加しました。見た目を極力変えない耐震補強により、開放的な祈りの場を実現しています。

シミズが社寺設計で培ってきた伝統と現代を融合させる高い専門技術力により、神殿の造替を完遂しました。全国の神社に奉仕する方々へ、継承の場を繋いでいくことができたと考えています。(木村)



世紀を超えて続く オフィスのRe-Novation

第一生命日比谷ファースト DAIICHI LIFE HIBIYA FIRST



“変わらないもの”と
“変えていくもの”の融合
意匠設計 佐々木 直人



二度目の再生
「最良たれ」を次の世代へ
意匠設計 吉田 健二

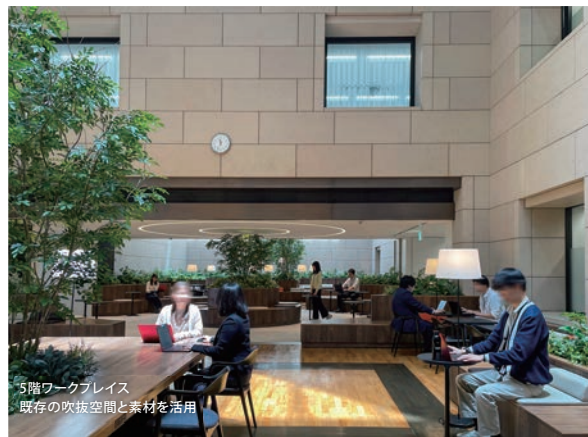


DNタワーから続くプロジェクトに
係わった 30年の想い
デザインディレクター 並木 良一(F4)

F4：株式会社フィールドフォー・デザインオフィス



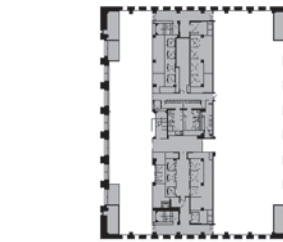
1階オフィスエントランス
石とブロンズのデザインにバイオフィリックを融合



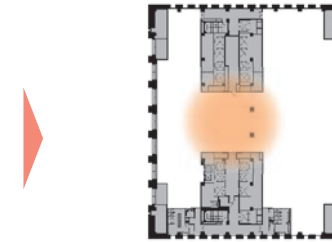
5階ワークプレイス
既存の吹抜空間と素材を活用



6階LOFT (ロフト＝共用スペース)
緑と光があふれるアトリウム空間



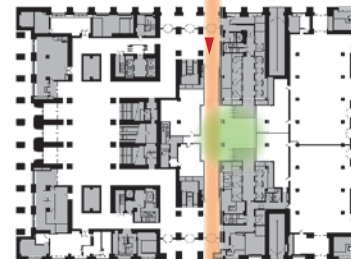
【基準階平面図 (リノベーション前)】



【基準平面図 (リノベーション後)】
トイレを外壁側に移動し執務空間の中央部をつなげて
一体化したオフィスを実現



【1階平面図 (リノベーション前)】



【1階平面図 (リノベーション後)】
南北に貫通する通路を新設し
オフィスエントランスを整備



壁の向こうは事務室



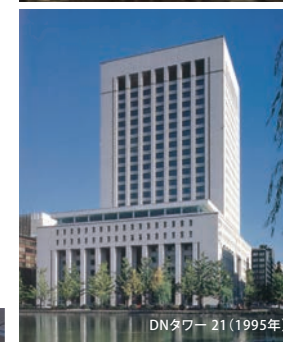
外部からの人の流れが生まれる
街区をまたぐ新たな動線



第一生命館 (1938年頃)



GHQ本部時代の第一生命館 (1945年頃)



DNタワー 21 (1995年)



マッカーサールーム (1995年完全保存)

日比谷に刻まれた建物の歴史

創業者の想いがつまった「第一生命館」は、1938年に創建され、今年で竣工後88年になりました。戦後GHQ本部が置かれ日本国憲法の原型となるGHQ草案が起草された建物も、竣工後約50年が経過して老朽化や機能低下が顕著になりました。そこで、既存建物の一部を保存活用することに加えて高層オフィスを新築し、1995年に「DNタワー 21」と名称を変えて再生されました。

それからさらに約30年が経過した現在。

社会情勢の変化や企業の変革に対応するため、「歴史の継承」と「テナントとの共創／協創」を目指して大規模なリノベーションを実施しました。(並木・佐々木)

これからの100年を見据えて

今回のリノベーションは、建物の在り方を根本から精査し、通常のオフィスビルでは成しえない大胆な計画を実現しました。建物の骨格をなすエントランスや基準階コアを移動・改造して建物全体のフロア構成や動線を再編しました。併せて、石とブロンズの堅く直線的な建物に、人の五感を刺激する自然のやさらかさを取り込みました。そして、中央部の壁が取り払われたフロアは東西一体となったワークスペースへ、かつての事務室は人々が行き交うオフィスエントランスへと生まれ変わりました。第一生命創業当時の「最大たるより、最良たれ」の精神は、新たなビル名称「第一生命日比谷ファースト」に受け継がれています。(吉田・佐々木)

都市の賑わいの中に浮かぶ
緑豊かな住まい創り

メガクニンガン プロジェクト

MEGA KUNINGAN PROJECT



外装・内装・外構まで
「オールシズデザイン」で完遂
意匠設計 寺崎 龍太郎



家族と友人に誇れる
プロジェクトを成し遂げた
意匠設計 GDE ADITYA



一体化の難題に挑み、
美しさと安心を両立する
構造設計 STEVANUS WIBISONO



異なる文化や特性を持つ
海外プロジェクトをハンドリング
デザイン 大久保 敏之(F4)

F4: 株式会社フィールドフォー・デザインオフィス

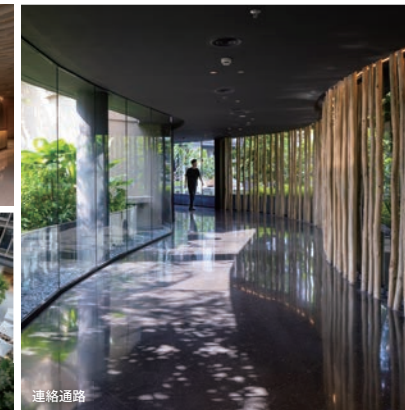


中庭&低層ファサード



レセプションホール

プール&中庭



連絡通路



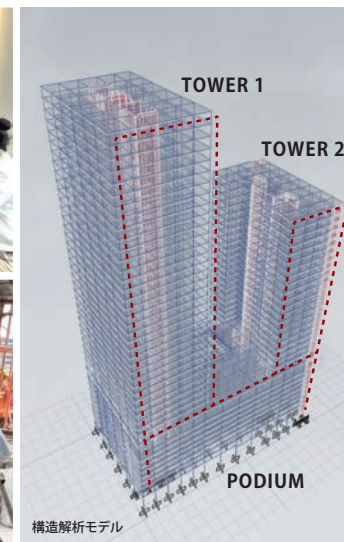
エントランス



グループディスカッション



現場材料確認



TOWER 1

TOWER 2

PODIUM

構造解析モデル

緑豊かなアーバンオアシス

メガクニンガンプロジェクトはインドネシア・ジャカルタの中心部に位置する高級コンドミニアムプロジェクトです。本建物はスカイプールやブリッジといった各種施設、様々な場所に用意された緑豊かな植栽、仕上げには周辺環境に調和する自然素材を取り入れることで「アーバンオアシス」を目指しました。

外装にはプレキャストコンクリートを採用し、耐震性に優れた壁・柱・梁で構成されています。これらは木やアースカラーを想起させる仕上げが施され、温かみのある空間を演出しています。(寺崎・大久保)

自然の形や質感を際立たせるインテリアデザインを目指しました。ルーバー天井には樹皮の質感を、壁面のアクセントには切り出した天然石の質感をそれぞれ取り入れました。ランドスケープデザインでは、四季折々に異なる花を咲かせる地元の樹木を選定することで、四季の変化を表現しています。(Aditya・大久保)

低層部で連結するツインタワーにおいて、異なる高さが生む複雑な地震時の挙動に対し、綿密な解析と剛性バランスの最適化を行うことで、構造的安定性と、快適な居住性を両立しています。(Wibi)

脱炭素も事業成長も
妥協しない
真のGXで持続可能な社会へ

**ZEB SEEKERを活用した
脱炭素コンサルティング**
DECARBONIZATION CONSULTING WITH ZEB SEEKER

- 

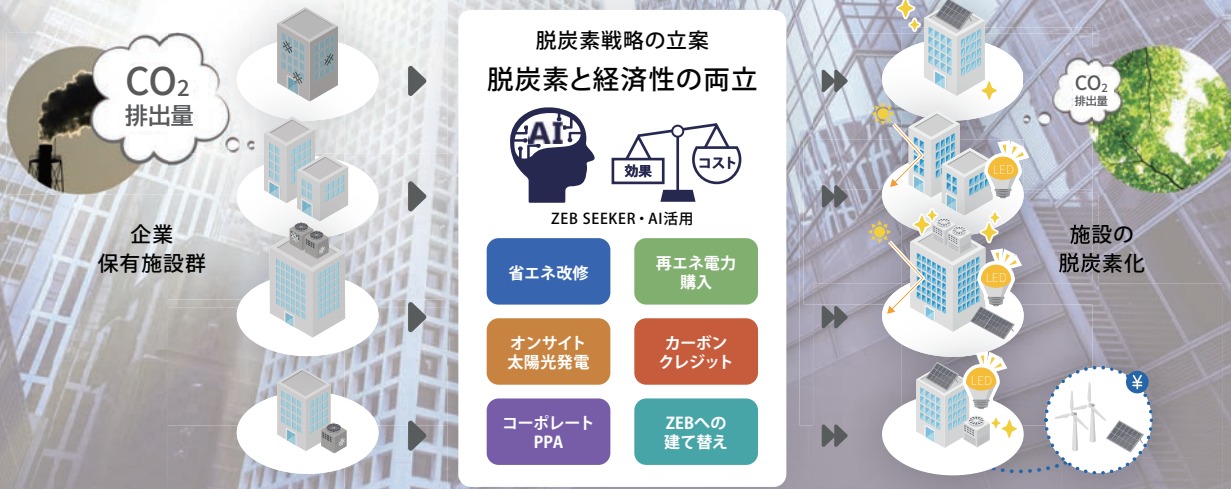
技術の力で
脱炭素経営の可能性を拡大
設備設計 太田 望
- 

お客様目線で進めた
機能拡充と営業展開
設備設計 富越 大介
- 

脱炭素ニーズを捉え
新規顧客開拓に挑戦
電気設計 森谷 真帆

投資対効果を高める脱炭素提案で お客様のファシリティマネジメントを もっと賢く、もっと合理的に。

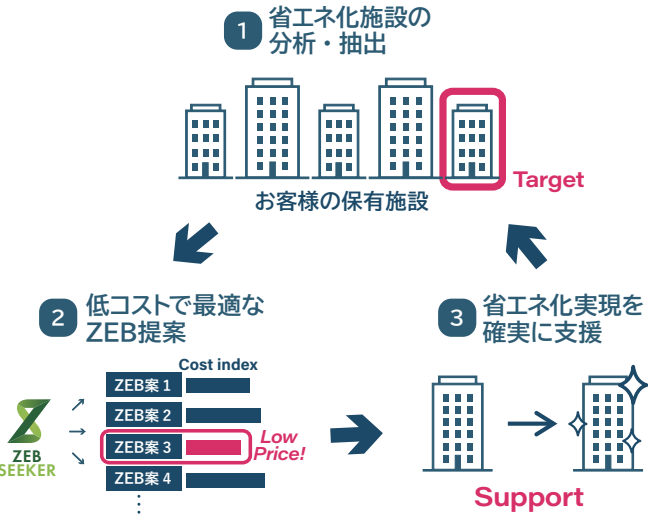
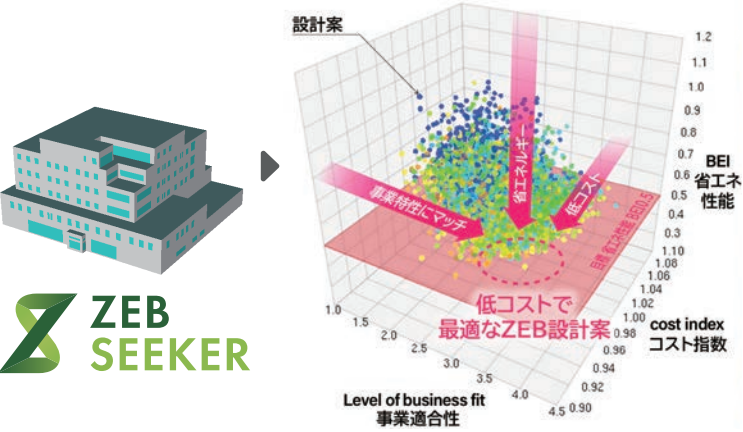
脱炭素は、これからの企業成長に欠かせない重要課題です。
私たちは独自技術「ZEB SEEKER」を活用し、コスト・環境性能・事業計画のバランスを可視化。
投資対効果を最大化する最適な施設運営へと導くことで、お客様の持続可能な経営を支えています。



省エネ性と経済性を両立する「ZEB SEEKER」

これまで、省エネ建築やZEB建築の推進には、コスト面での課題がつきものでした。特に昨今は建設費の高騰により、その傾向が一層強まっています。脱炭素化を進めたい一方で、建設費が大きなハードルとなる——そうしたお客様の悩みに応えるため、自社開発の省エネ性能評価シミュレーションツール「ZEB SEEKER」に、新たにコスト評価の機能を追加しました。見積関連部署と共同で整備した1000項目近くの見積データベースを組み込むことで、本機能を実現しています。

これにより、目標とする省エネ性能を満たしながら、省エネ性と経済性を両立した設計提案が可能となり、お客様の設備投資やファシリティマネジメントをより効果的に支援できるようになりました。(富越)



新たな脱炭素コンサルティングへの展開

「ZEB SEEKER」は当初は設計支援ツールとして開発したのですが、新たに、本ツールを活用してお客様の施設群全体の脱炭素化を支援するコンサルティングを開始しました。そして施設の計画・運用・更新といったライフサイクル全体に寄り添いながら支援できる体制を整えました。

従来の設計業務の枠を超えた新たなビジネスの創出・展開は、私たちにとっても大きな挑戦であり、新しい価値を生み出す取り組みとしてやりがいを感じています。(森谷)

建築・土木・医療の分野を横断した
災害医療連携の枠組みと
病院DXによるレジリエントな
社会の実現へ

人吉・球磨地域の医療連携の 取り組みと院内情報連携システム 「Hub360」の開発

Hospital Information Integration System「Hub360」



コンセプトは平時・災害時
フェーズフリーな病院DX
医業コンサルタント 山出 文香



建築・土木・医療の知見を融合し、
産学官29機関による地域連携を推進
防災計画 諸星 玲子



災害対策本部にてHub360を使用した院内被災情報収集と陣頭指揮を行う



院内の各トリアージエリアの患者情報を見て、スタッフの応援要請を行う副本部長



各エリアの職員の参集情報を確認

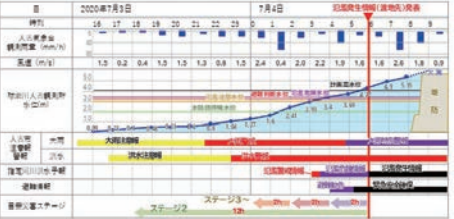


地域の医療機関、消防、医師会などが参加し、地域連携による水害時の防災行動や
タイムラインを検討するワークショップ

地域での防災訓練

人吉・球磨地域における災害医療連携の取り組み

令和2年7月豪雨の教訓を踏まえ、清水建設がファシリテーターとなり、建築・土木・医療の専門家が分野を横断して災害医療連携を検討する枠組みを構築しました。主な取り組みは「水害リスクの自分事化」と「共助」を目的としたプログラムの推進、過去の降雨・河川水位記録を用いた、実効性の高い「水害タイムライン」の検討、ワークショップを通じた、発災前からの情報連携や防災行動のタイミングの具体化です。これらの活動により、地域連携の実効性が増し、地域医療レジリエンスの強化が図られています。今後もタイムラインの改善・運用を継続し、災害時の医療継続体制のさらなる向上を目指していきます。(諸星)



豪雨時の降雨量と河川水位、警報・注意報の発令状況、発災前までの
時間的猶予を、時系列で科学的に分析したもの。
これに基づきタイムラインのトリガーを設定



災害医学会で口演

院内情報連携システム Hub360

平時の救急現場の効率化に加え、災害時の逼迫した医療現場の情報を整理し、院内の災害対策本部の迅速な陣頭指揮を支援するシステムを開発しました。このシステムのポイントは、院内に散在する人員・医療機器・ベッドなどのリソース情報と、救急患者や防災タスクの状況をリアルタイムに一元化・可視化する点にあります。従来、紙や電話、ホワイトボードで行われていた情報伝達をデジタル化することで、迅速かつ的確な意思決定を支援します。更に院内のシステムと連携することで、入力の手間も大きく削減されます。これにより、医療従事者は診療に専念でき、業務効率化と医療の質向上を両立できます。本年度より、全国の医療機関向けに本システムの販売を開始しました。今後は更に地域医療連携にも活用できるシステム拡張を目指しています。(山出)



Hub360「救急患者カンバン」により救急患者タスクを直感的に把握



病院目線でHub360の操作確認を行う社内レビュー会議

『Pandemic Ready × ZEB Ready』 技術で拓く サステナブル医療

Pandemic Readyを実現する 技術開発

Technology development for Pandemic Ready

※2024年度 空調衛生工学会 技術開発部門 技術賞 受賞

- 

快適な療養環境と安全・安心
その本質を常に問い続ける
意匠設計 山本 武
- 

難題に挑むほど、
技術はおもしろくなる
設備設計 水野 真広

i-RESS[※]で Pandemic Ready と ZEB Ready を実現

※ infection control - Resilient & Ecological & Sustainable System
Resilient (回復力がある)、Ecological (省エネ)、Sustainable (持続可能) なソリューションにより、医療施設に適した感染症対策と省エネの両立で ZEB Ready を実現



Pandemic Ready

マスクのいない4床室

I. プッシュ・プル式空調システム

4床室における空調・換気のパーソナリ化

天井：給気口
壁面：吸込口

可動間仕切り

天井内ダクトに接続

エアフロー

エアフロー

病室 俯瞰イメージ

感染患者

吸込口パンチングメタル
(メタルアートデザイン)

II. 空気感染にも対応可能な4床室

中性性能フィルタ付空調機

UV デバイス

ZEB Ready を達成する高い省エネルギー効果

III. 4床室に特化した動体検知・空調制御

人感センサー・AI カメラ

換気回数 6 回 /h → 10 回 /h

IV. 低リーク型全熱交換器

①②により空調機本体の
リーク率5%以下
熱交換効率60%以上

①給気ファン 配置変更

中性性能フィルタ

給気

還気

外気

排気

②ローター (バジセクタ組込)

排気ファン

感染症に強く、環境にもやさしい病院を目指して

「Pandemic Readyを実現する技術開発」は、未知の感染症への備えと省エネルギー性能の両立を目指した取り組みです。コロナ禍を契機に、医療施設では感染性呼吸器粒子 (IRPs) への対策が重要となり、平時の快適性・省エネルギー性を維持しながら、有事には感染リスクを速やかに低減できる環境が求められるようになりました。その考え方を具現化したのが、「Pandemic Ready」と「ZEB Ready」を融合したi-RESSです。感染対策を建築・設備にあらかじめ組み込み、医療の継続性と環境性能を両立することを目指しました。

この開発は医学と建築設備技術の連携により進められました。清水建設、順天堂大学、早稲田大学は2009年から感染対策建築の共同研究を進め、順天堂B棟では多床室の感染リスク低減効果を実証しました。2020年にはパンデミックレディ共同研究講座を設立し、建築・設備・什器・運用を横断した技術体系へと発展させました。医療現場で真に求められる性能を追求しながら、社会実装を見据えた技術へと磨き上げました。(山本)

2009年～
●清水建設、順天堂大学、早稲田大学にて
共同研究で建築の感染制御を推進

2020年～
●新コンセプト Pandemic Ready を推進
●病院施設における ZEB Ready の実現

順天堂医院 B棟で実現 (2015年病棟完成)

プッシュプル式空調システム

天井放射空調パネル

吹出口

吸込口

エアフロー

ベッド間の間仕切り
(飛沫遮断対策)

●新たな評価手法・ツール開発 (iRAT)
●新たな感染リスク低減手法開発
●ZEB との両立
●PMF (Product Market Fit)

・3つの感染経路を制御
・放射空調+1方向流れによる
空気感染リスクを低減する多床室
・2018年度 空調衛生工学会 技術賞受賞

・3つの感染経路+エアロゾル感染を制御
・プッシュ・プル式空調システム等
・2024年度 空調衛生工学会 技術賞受賞

開発技術の一例 プッシュ・プル式空調システム

従来の空調システム (対流空調システム)

吸込口 (患者頭側天井)

空調機 (給気・吸込) (4床室中央)

新空調システム「プッシュ・プル式空調システム」

吸込口 (患者頭側壁面)

給気口 (患者足元側天井)

捕集効率 95% 以上 (N95 マスク同等以上)

新型コロナウイルス感染対策の最前線で医療従事者が着用するN95マスク (0.3μmの粒子を95%捕集) の通過効果を超える

シミュレーション

実験・モックアップ

模擬感染者

蛍光粒子

非蛍光粒子

模擬咳発生装置

電磁弁・コンプレッサー

粒子種類: 蛍光粒子 (乳糖・リボフラン混合粉体)

粒子径: 0.5~15μm

模擬咳発生装置を用いて咳のマイクロ飛沫を蛍光ラクトース粉体で評価

対面エリア

サンプリングポート

パーティクルカウンター

感染対策と省エネルギーの二律背反への挑戦

感染対策を高めれば、エネルギー消費は増えます。本開発は、その前提を技術で見直した点に価値があります。患者ごとに気流をつくるプッシュ・プル式空調、UVと中性性能フィルタを組み合わせた空気感染対策、在室状況に応じて換気量を制御する省エネルギー技術、安全性と熱回収を両立する全熱交換器を統合し、安全性と省エネルギーを両立しました。モデルではBEI0.49を達成し、ZEB Ready水準をクリアするとともに、病棟全体で約60%のエネルギー削減効果を確認しました。これらの技術をシステムとして統合し、感染対策・快適性・省エネルギーを同時に実現する設計思想を提示した点が、本開発の特徴です。未知の感染症に備えるレジリエンスと環境負荷低減を両立する、次世代の建築設備の新たな方向性を示しました。(水野)

地球を救う未来のコンクリート 『CCC』を用いた完全循環型の 展示空間

NEDOムーンショット型研究開発事業 大阪・関西万博 出展

Moonshot Research and Development Program
Exhibiting at the Osaka-Kansai Expo



左上より
谷 泰人、南川 大輔、渡邊 美土里、前田 雄太郎、大西 慶太郎、
小林 稜治、吉田 俊介、秋田 湧大、栗津 里紗子、木村 友香、
小茂田 和、田島 悠斗、島田 大偉、花房 秀華、元野 真衣子、
渡邊 享哉、林 晃平、三宅 皓一郎、油野 登梧



万博展示風景

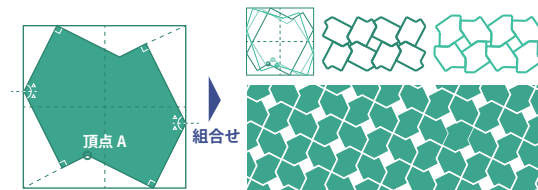


協賛した
株式会社カッシーナ・イクスシー
のHPにてこの取組みが
紹介されました。



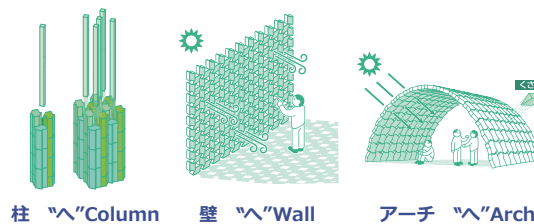
平面充填可能で、無限に拡張可能な『への字ユニット』

『への字ユニット』は、正方形に内接する8面体で、頂点Aの位置によって様々な形に変形する。
開口を有しながら平面充填可能な図形で、組み合わせることによって無限に拡張することができる。



『への字ユニット』を建物の構造体として発展

ユニットの形によって開口の大きさが変化し、部材の性能や性質が変化する。
その特性を活かし、建物の構造体である柱、壁、アーチへと発展する。



CCC と再生材を組み合わせた構造モックアップ兼展示台



「ふれる・つくる・かんがえる」体験展示



CCCによる地球と建築の未来

CCC とは、炭酸カルシウムコンクリートの略称で、
大気中のCO₂、廃コンクリート、水のみを原料とする
完全資源循環型の建材です。技術研究所とstream
DEW 2025のメンバーが中心となり、CCCを用いた建
築の未来像を展示しました。

『への字ユニット』から生まれる未来の建築

子どもの興味を引く面白い形、かつ建物の構造体として発展性もある
「への字ユニット」を開発しました。ユニットの組合せにより生まれる柱・
壁・アーチを構造モックアップ兼展示什器として製作し展示しています。
CCC以外のほぼ全ての材料は清水建設から出たごみを再生して作って
おり、展示空間全体で資源循環社会を表現しました。

地球環境への関心を育む体験展示

ものづくりと地球環境への関心を育む展示として、
CCCの製造やバーチャルで「への字ユニット」を体験
できる展示を計画しました。万博当日は、多くの
子どもたちと対話し、体験を共有することで、私たち
にとっても大きな学びの場となりました。

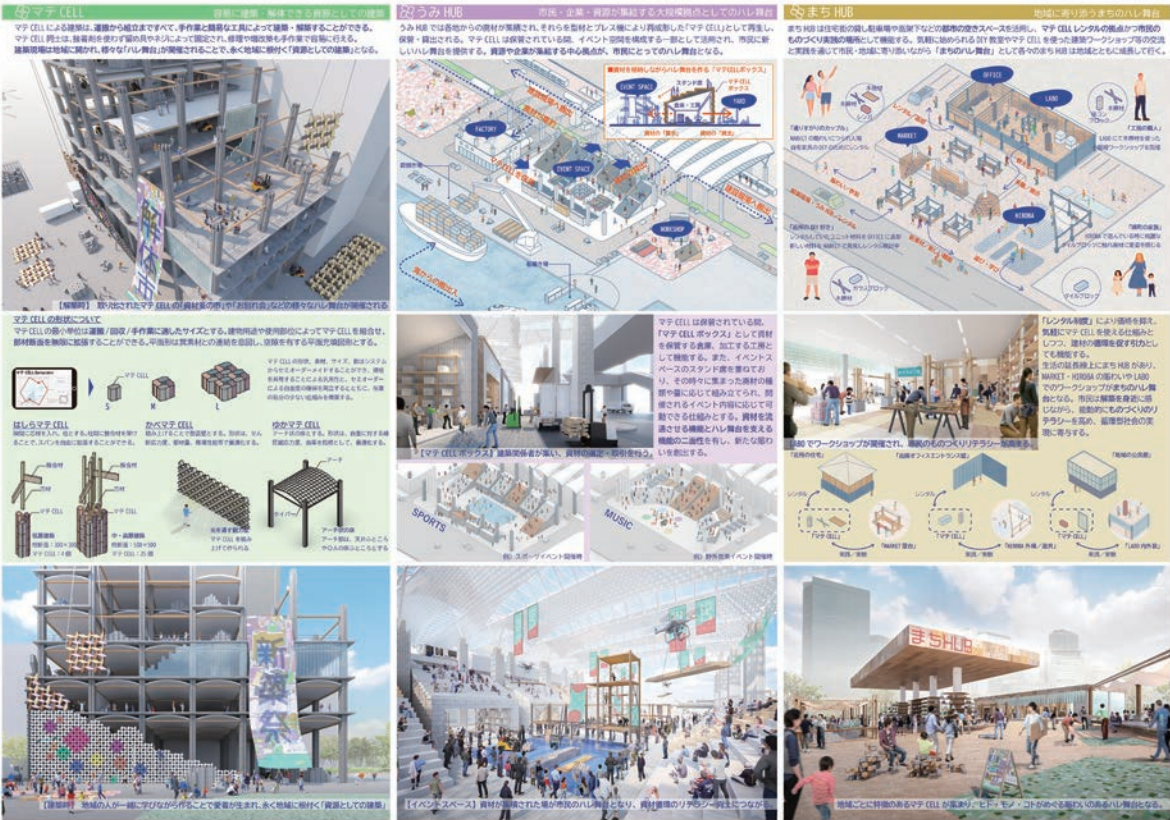
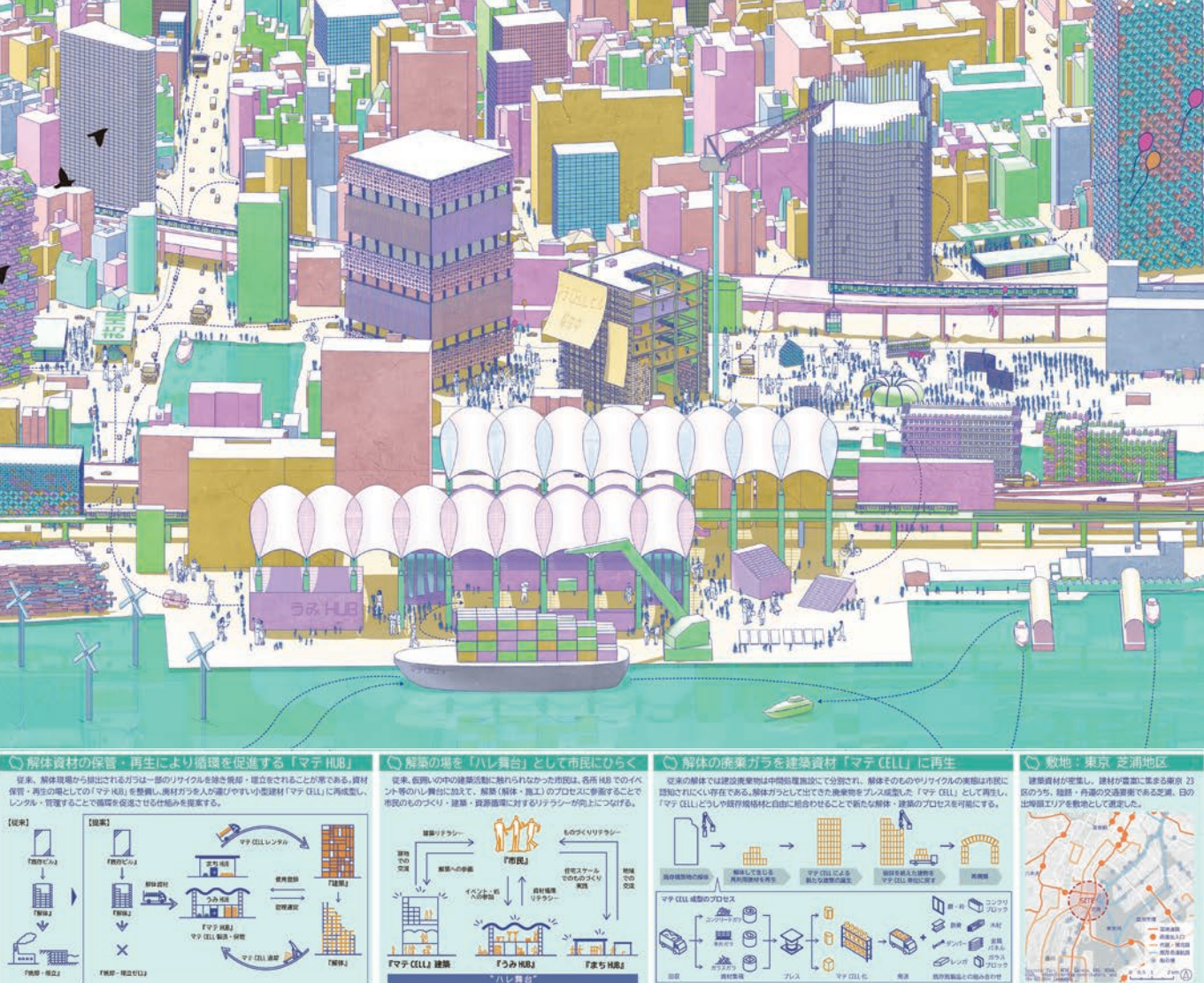
(前田・小茂田)

建築界から廃棄物の概念をなくした未来を創造する

日本建築学会設計競技「解築学を可視化する」 AIJ Design Competition "Visualizing De-construction Studies"



左上より
谷 泰人、南川 大輔、小林 稜治、吉田 俊介、
大西 慶太郎、秋田 湧大、前田 雄太郎、粟津 里紗子、
小茂田 和、田島 悠斗、島田 大偉、渡邊 美土里、
渡邊 享哉



解築学への挑戦

DEW委員の中から有志を募り、解築学という新たな課題に挑戦しました。現状閉ざされている建築・解体のプロセスを「ハレ舞台」として捉え直し、資材の循環を支える

「マテHUB(マテリアルハブ)」を拠点として、廃材がいきいきと循環する未来像を提示しました。資源都市という未来像を建築的・社会的に鮮やかに描き出し、持続可能な都市像に対する新たな提案が評価され、見事支部入選を獲得しました。



飽くなき挑戦を続ける 無二のエンジニアリング

留学体験記

SOM (Skidmore, Owings & Merrill LLP)

構造設計 小澤 祐周



世界一の設計事務所の中で

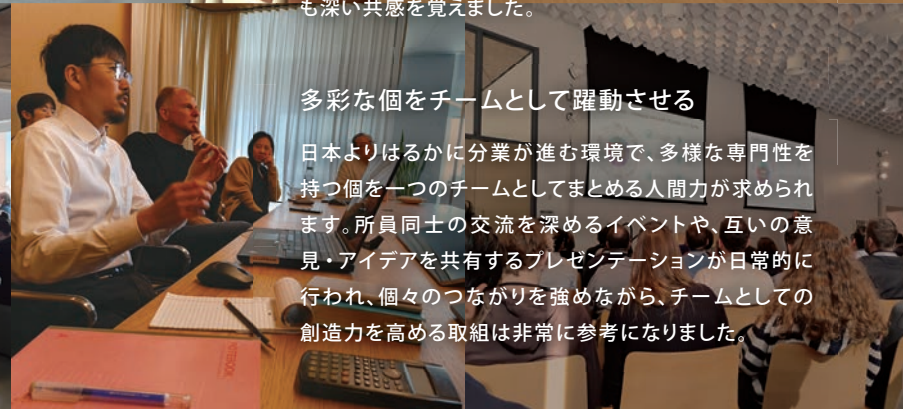
2024年7月より1年間、会社の留学制度を活用し、米国・ニューヨークのSOM (Skidmore, Owings & Merrill LLP) にて実務研修の機会をいただきました。世界的な大規模再開発や超高層建築の設計をリードするSOMで、プロジェクトを実現へと導くストーリー構築力と、多職種連携による技術的な裏付けの重要性を深く学びました。アーキテクトとエンジニアが議論を重ねながらアイデアを創出し、ディテールを決定していく一連のプロセスを経験できた、とても貴重な一年となりました。

エンジニアリングの力

アーキテクトの思いから生まれる特徴的なデザインを実現する過程で、最新のIT技術を積極的に取り入れる柔軟性と挑戦する姿勢に強く惹かれました。困難な課題にも前向きに向き合い、そのプロセス自体を楽しむ姿勢にも深い共感を覚えました。

多彩な個をチームとして躍動させる

日本よりはるかに分業が進む環境で、多様な専門性を持つ個を一つのチームとしてまとめる人間力が求められます。所員同士の交流を深めるイベントや、互いの意見・アイデアを共有するプレゼンテーションが日常的に行われ、個々のつながりを強めながら、チームとしての創造力を高める取組は非常に参考になりました。



世界から選ばれる設計事務所での挑戦

会社の留学制度を活用し、米国・ニューヨークの建築設計事務所 Kohn Pedersen Fox (KPF) にて1年間の実務研修の機会をいただきました。超高層タワーや大規模再開発で世界を牽引し、グローバルなクライアントから絶大な信頼を勝ち取り続けるKPF。その最前線で、5つのプロジェクトに携わり、デザインの初期検討から施工時対応まで一連の設計プロセスを担当し、「企業文化」「デザインプロセス」「プロジェクト管理」「ブランディング」の実務戦略を体得しました。

個を磨き、チームで世界を動かす

世界中から優秀な人材が集う環境では、熾烈な競争と自己主張が求められ、困難の連続でした。しかし、多様な価値観が交錯する中で磨かれるデザインや、最先端の設計手法、そして日本とは異なる専門意識に基づいた働き方を肌で学ぶことができました。単に優れた正解を提示するだけでなく、グローバルなクライアントとの合意形成を導く舵取りの重要性を痛感しました。また、世代を超えた学び合いによる専門性の追求、多様なプロとの協働によるチーム・オーケストレーションの意義を理解できたことは、意匠設計者としての私の職能を大きく拡張する貴重な経験となりました。

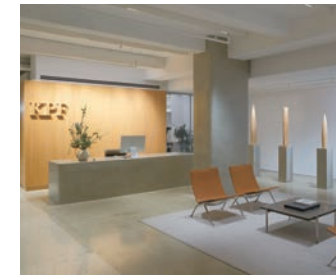


世界が集まるニューヨークで 世界を動かすデザインを学ぶ

留学体験記

Kohn Pedersen Fox

意匠設計 田代 直人



境界を超えて

留学体験記

Harvard Graduate School of Design

意匠設計 入部 寛 (Yutaka R. IRIBE)



ハーバード大学GSDでの1年

「学際性が生み出す創発的活動の探求」をテーマとし、多くの方々に支えられ、Harvard Graduate School of Design (GSD)へ1年間留学しました。在学中はMITの授業も履修でき、ふたつの大学を行き来しながら、建築の枠を超え、生態学、経済学、文化人類学、物性科学などの周辺領域に飛び込み、世界中の多才な学生らと席を並べる、非常に刺激的な時間でした。

苦楽の道中を楽しむ

GSDでは知識の蓄積よりも、教授らと対等に議論し、彼らを超えることを求められました。素材の物性に関する課題では、物に宿る人の記憶をテーマに、複数の瞬間を収めた写真からテクスチャを抽出し、FRP(ガラス繊維樹脂)で成型・積層することで、透過する光の加減によって過去と今が行き交う素材を制作しました。正解のない製作過程の中で、教授や友人らと試行錯誤しながら探求した経験が、貴重な財産となりました。

学際的創造の実践に向けて

効率化が重視され、AIが答えらしきものを簡単に出す時代に、懐疑的かつ複眼的な視点を持つことの重要性を痛感しています。GSDとMITで他者と対話しながら探求したプロセスから得た経験を、今後は部門、企業、業界といった境界を超えて新しい価値を創造し、社会へ還元していきます。



講評会の様子@GSD



授業の様子@MIT



クラブ活動(GSD Sketching Group)



Sarah学長との面会



AEC TECH BEST@New York



毎週金曜のGSD Beer 'n Dogs



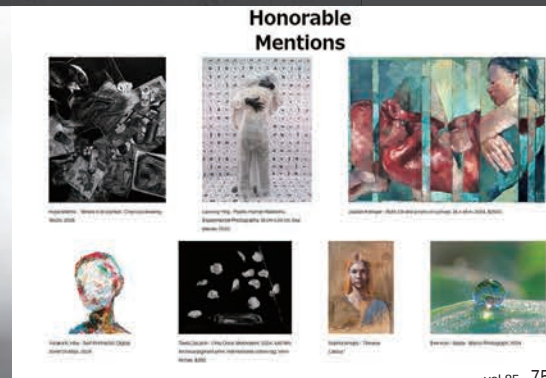
共にGSDに通う日本人学生らとの交流



Charcoal Drawing Class : 現実から空想へ。(左)10秒デッサン(右)



Faux (Fake Material) Class : 偽素材を単なる模倣に留めず、ものに宿る記憶を写しとる媒体とし、複数の時間軸を共有する住宅を提案



在学中に応募したアートコンペで優秀賞を受賞(左下)

清水建設 東京木工場

建築主　：清水建設株式会社
主要用途：工場、事務所
意匠設計：山田 徹・菊田 大典・加藤 ひかる・藤田 倫也・島田 大偉
構造設計：佐藤 彰・石川 健二・高倉 正幸・菅原 和正
設備設計：佐藤 孝司・小坂 千里・瀬上 征・瀧崎 幹仁・亀田 孝彦
電気設計：笹木 一宏・今村 達
敷地面積： 6,601.40 m²
建築面積： 2,627.72 m²
延床面積： 51,195.12 m²
構　造：S造（一部木造）
規　模：地上3階
竣工年：2026 年
所在地：東京都江東区木場 2-15-3
写　真：NARU建築写真事務所　中塚 雅晴

東京ドリームパーク

建築主　：株式会社テレビ朝日
主要用途：劇場、集会場
意匠設計：大橋 一智・蔵品 誠・石川 慎一郎・紺世 裕子・小野 智也・米山 魁
構造設計：諸星 雅彦・平 高雄・南 博之・池尻 佳朗・滝澤 千尋・谷本 満里菜・増澤 史恵・本多 咲紀
設備設計：高橋 満博・小竹 篤・石田 吉文・大多和 真・都築 弘政
電気設計：伊藤 靖・菅 裕之・遠藤 光郎・野崎 藍平・道 洗介
都市計画許可対応、橋本 崇・小竹 輝彰・松浦 遼・服部 晃佑
敷地面積： 12,920.05 m²
建築面積： 10,322.73 m²
延床面積： 46,766.77 m²
構　造：SRC造一部S造
規　模：地上11階・地下1階
竣工年：2026 年
所在地：東京都江東区有明三丁目3-8
写　真：田中 克昌
株式会社エスエス　根本 孝佑
株式会社近代建築社　中尾 健太郎

福岡歯科大学・福岡医療短期大学 新キャンパス整備計画 新本館

建築主　：学校法人福岡学園
主要用途：大学、高等学校
意匠設計：加地 則之・田淵 英二・石坂 聡
構造設計：田村 浩史・岡 遼恒
設備設計：西田 祥希
電気設計：角田 裕樹
インテリアデザイン(STEP COMMONS)：フィールドフォー・デザインオフィス　井筒 英理子
照明デザイン(STEP COMMONS)：大好照明株式会社
設備設計：塚原 和佳奈・千本 雄登・白倉 里津
電気設計：中尾 善弘・井上 幹大
インテリアデザイン・外構デザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
敷地面積： 75,492.05 m²
建築面積： 5,206.90 m²
延床面積： 21,869.92 m²
構　造：S造
規　模：地上6階
竣工年：2025 年
所在地：福岡県福岡市早良区田村2丁目15-1
写　真：株式会社エスエス　中島 真吾

清和銀座ビル

建築主　：清和綜合建物株式会社
主要用途：物販店舗、飲食店舗、サービス店舗、事務所
意匠設計：加登 剛司・谷津 健志・小林 稜治・寺嶋 啓介
構造設計：石倉 敦・津曲 敦・日野浦 雄高
設備設計：佐藤 孝司・吉田 健一・佐藤 啓明・荻野 靖子
電気設計：尾澤 洋光・吉田 圭佑・柳野 幸人・鈴木 亮佑
敷地面積： 396.85 m²
建築面積： 357.61 m²
延床面積： 4,660.87 m²
構　造：S造・SRC造
規　模：地上13階・地下1階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都中央区銀座 5丁目8番15号
写　真：株式会社エスエス　鳥尾 望

第一生命京橋キノテラス

建築主　：第一生命保険株式会社
主要用途：事務所、店舗等
意匠設計：内藤 純・池田 賢介・永山 晃平
構造設計：下鍋田 聡志・武田 典佳
設備設計：増田 奈保子・藤田 涉
電気設計：尾澤 洋光・小西 優斗
敷地面積： 1,332.24 m²
建築面積： 1,230.78 m²
延床面積： 16,151.25 m²
構　造：S造一部木造及びRC造
規　模：地上12階・地下2階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都中央区京橋 2-4-12
写　真：株式会社エスエス　鳥尾 望

学校法人瀧川学園

滝川中学校・高等学校 総合棟 -Main Port-

建築主　：学校法人瀧川学園
主要用途：中学校、高等学校
意匠設計：加地 則之・田淵 英二・石坂 聡
構造設計：田村 浩史・岡 遼恒
設備設計：西田 祥希
電気設計：角田 裕樹
インテリアデザイン(STEP COMMONS)：フィールドフォー・デザインオフィス　井筒 英理子
照明デザイン(STEP COMMONS)：大好照明株式会社
設備設計：塚原 和佳奈・千本 雄登・白倉 里津
電気設計：中尾 善弘・井上 幹大
インテリアデザイン・外構デザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
敷地面積： 16,654.78 m²
建築面積： 2,294.22 m²
延床面積： 5,266.03 m²
構　造：RC造（一部S造）
規　模：地上3階
竣工年：2025 年
所在地：兵庫県神戸市須磨区宝田町 2丁目1番1号
写　真：株式会社 FOTOTECA　木田 勝久

河北総合病院

建築主　：社会医療法人 河北医療財団
主要用途：病院
意匠設計：大石 茂・岡崎 亜都夫・平田 郁子・石井 康平・眞鍋 啓・岡村 美朱子
構造設計：菅野 英幸・日吉 良昭・佐々木 由美・小川 光陽
設備設計：辻 裕次・中村 友久・佐藤 啓明・古本 美希・岡埜 藍子・吉野 優実子・千本 雄登
電気設計：幸島 大・竹田 好宏・天野 祐太・馬込 仁総・中山 浩市
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス
原田 靖之・伊藤 公美・山口 玲子・本多 裕紀
敷地面積： 11,163.21 m²
建築面積： 4,842.27 m²
延床面積： 32,134.28 m²
構　造：S造(RCST 構法)・基礎免震
規　模：地上9階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都杉並区阿佐谷北 1-6-1
写　真：株式会社エスエス　走出 直道

花王和歌山研究所 Lifestyle Innovation Center

建築主　：花王株式会社
主要用途：事務所(研究所)
企　画：品川女子学院 新校舎整備計画建築委員会
基本計画・監修：株式会社地主進大設計事務所 (A棟)
設計責任者：端野 亮一
意匠設計：日野 哲也・加藤 直樹・永野 仁志・佐原 あい・田主 望・岡野 晶
構造設計：山岸 俊之・滝山 貴志・佐野 達彦・鳥越 さくら
設備設計：中村 友久・佐藤 啓明・藤井 孝行・千本 雄登・戸髭 涼子
電気設計：中澤 公彦・松田 光弘・井上 幹大 (B棟)
意匠設計：田中 裕伸・前田 雄太郎
構造設計：山岸 俊之・渡邊 浩平・西壁 裕典
設備設計：中村 友久・向島 希・三宅 絵美香
電気設計：松田 光弘・宮原 晋一郎・堀澤 葉由子・山形 弥里 (C棟)
意匠設計：南野 友子
構造設計：渡邊 浩平・久米 建一
設備設計：中村 友久・三宅 絵美香
電気設計：宮原 晋一郎・松村 陽介
敷地面積： 8,878.51 m²(ABC棟合計)
建築面積： 5,493.69 m²(ABC棟合計)
延床面積： 19,388.58 m²(ABC棟合計)
構　造：RC造一部S造(AC棟)・S造一部SRC造(B棟)
規　模：地上4階(A棟)
敷地面積： 472.03 m²
建築面積： 311.72 m²
延床面積： 2,485.78 m²
構　造：RC造（一部木造）
竣工年：2025 年
所在地：東京都品川区北品川 3-3-12
写　真：株式会社エスエス　走出 直道

徳島信用金庫新本店・本部

建築主　：徳島信用金庫
主要用途：信用金庫
意匠設計：加地 則之・田淵 英二・新屋 江里子(元社員)
構造設計：船所 佑樹・嶋田 あゆみ
設備設計：大多和 真・都築 弘政
電気設計：山形 弥里
内装コンセプトデザイン：Fy design studio
照明デザイン：コイズミ照明株式会社
サインデザイン：hokkyok株式会社
敷地面積： 16,654.78 m²
建築面積： 2,294.22 m²
延床面積： 5,266.03 m²
構　造：RC造（一部S造）
規　模：地上3階
竣工年：2025 年
所在地：兵庫県神戸市須磨区宝田町 2丁目1番1号
写　真：株式会社 FOTOTECA　木田 勝久

住友重機械工業横須賀製造所 技術研究・開発棟 Cs'-Lab+

建築主　：住友重機械工業株式会社　横須賀製造所
主要用途：研究所(事務所)
意匠設計：小玉 敦也・秋山 暢大・戎井 知恵
構造設計：見分一郎・青木 和巳・阪口 一真
設備設計：鈴山 洋平
電気設計：水野 大輔・米倉 裕修・篠原 大哉
ワークプレイス・FMコンサル：田中 厚三・小川 麻衣子・渡倉 実穂
インテリアデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス　赤澤 知也
敷地面積： 523,419.16 m²
敷地面積： 4,245.90 m²
延床面積： 19,546.76 m²
構　造：RCSS造
規　模：地上6階
竣工年：2025 年
所在地：神奈川県横須賀市夏島町 19 番地
写　真：ゴトウフォトオフィス　後藤 晃人

品川女子学院　A・B・C棟

建築主　：学校法人 品川女子学院
主要用途：中学校、高等学校
企　画：品川女子学院 新校舎整備計画建築委員会
基本計画・監修：株式会社地主進大設計事務所 (A棟)
設計責任者：端野 亮一
意匠設計：日野 哲也・加藤 直樹・永野 仁志・佐原 あい・田主 望・岡野 晶
構造設計：山岸 俊之・滝山 貴志・佐野 達彦・鳥越 さくら
設備設計：中村 友久・佐藤 啓明・藤井 孝行・千本 雄登・戸髭 涼子
電気設計：中澤 公彦・松田 光弘・井上 幹大 (B棟)
意匠設計：田中 裕伸・前田 雄太郎
構造設計：山岸 俊之・渡邊 浩平・西壁 裕典
設備設計：中村 友久・向島 希・三宅 絵美香
電気設計：松田 光弘・宮原 晋一郎・堀澤 葉由子・山形 弥里 (C棟)
意匠設計：南野 友子
構造設計：渡邊 浩平・久米 建一
設備設計：中村 友久・三宅 絵美香
電気設計：宮原 晋一郎・松村 陽介
敷地面積： 8,878.51 m²(ABC棟合計)
建築面積： 5,493.69 m²(ABC棟合計)
延床面積： 19,388.58 m²(ABC棟合計)
構　造：RC造一部S造(AC棟)・S造一部SRC造(B棟)
規　模：地上4階(A棟)
敷地面積： 472.03 m²
建築面積： 311.72 m²
延床面積： 2,485.78 m²
構　造：RC造（一部木造）
竣工年：2025 年
所在地：東京都品川区北品川 3-3-12
写　真：株式会社エスエス　走出 直道

フェアモント東京

建築主　：野村不動産株式会社
主要用途：ホテル
ホテルPM：石谷 貴行
意匠設計：清水 壮輔・加藤 万貴・丸山 亮介・新谷 佑磨・森 加原・高木 りさ・堀江 葉士
設備設計：高 悠哉
電気設計：伊藤 統
敷地面積： 40,104.29 m²
延床面積： 27,523.12 m²
延床面積： 267,005.51 m²(うち、ホテル部分 32,773 m²)
構　造：S造・RC造（一部CFT造）
敷地面積： 5,138.99 m²
規　模：地下2階～2階・4階・5階・34階～43階(ホテル部分)
竣工年：2025 年
所在地：東京都港区芝浦 1-1-1
写　真：Nacasa & Partners　佐藤 絢香・板垣 旭洋・須田 遥太

Hi-gs 日本橋

事業主　：株式会社東日本銀行(土地信託委託者兼受益者)
建築主　：三井住友信託銀行株式会社(土地信託受託者)
主要用途：事務所、物販店舗、サービス店舗、自動車車庫
意匠設計：鈴木 邦典・南川 大輔・藤田 倫也・久津輪 湊
構造設計：中谷 亮太・水島 文哉
設備設計：増田 奈保子・荻原 隆太郎
電気設計：野崎 藍平・道 洗介
設計・監理：(実施設計、監理)清水建設株式会社一級建築士事務所 (基本設計、実施設計監修)株式会社山下設計
敷地面積： 1,056.67 m²
敷地面積： 181.54 m²
建築面積： 957.91 m²
延床面積： 11,524.42 m²
構　造：S造・RC造（一部SRC造）
規　模：地上12階・地下1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都中央区日本橋 3-11-2
写　真：株式会社エスエス　小塚 直浩

プライマル品川大井町

建築主　：第一生命保険株式会社
主要用途：共同住宅
意匠設計：荻原 史郎・根ヶ川 愛子・富安 達朗・紺世 裕子・安岡 理子・木村 友香・日下 朝香
構造設計：上原 大輔・石原 澤・有馬 真輝
設備設計：山崎 ひなみ・池松 由良
電気設計：島村 美季・中山 浩市・内田 慎太郎
敷地面積： 472.03 m²
建築面積： 311.72 m²
延床面積： 1,464.38 m²
構　造：RC造（一部木造）
竣工年：2026 年
所在地：東京都品川区大井四丁目17-16
写　真：株式会社エスエス　大野 賢一

ミタマチテラス

建築主　：中央日本土地建物株式会社
主要用途：事務所、飲食店、物販売店、集会場、児童福祉施設等、自動車車庫、自転車駐輪場等
意匠設計：中村 謙・北川 春樹・深町 駿平・寺嶋 啓介・櫻田 留奈
構造設計：諸星 雅彦・浅見 達郎・亀井沢 圭介・若山 志津佳・横澤 研太
設備設計：百瀬 隆・佐藤 孝司・荻野 靖子・甲嶋 孝平・藤井 孝行・吉野 優実子
電気設計：坂下 孝幸・尾澤 洋光・山田 充孝・吉田 圭佑・小林 逸人
基本設計・設計監修：株式会社 日本設計
ランドスケープデザイン協力：合同会社 HOC
建築面積： 5,138.99 m²
敷地面積： 2,878.13 m²
延床面積： 55,498.00 m²
構　造：S造一部SRC造・RC造
規　模：地上20階・地下3階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都港区芝 5丁目34番2号
写　真：株式会社エスエス　鳥尾 望・小塚 直浩

高山商事株式会社 本社

建築主　：高山商事株式会社
主要用途：事務所
意匠設計：今野 清・岸野 裕也
構造設計：大藤 大助・宮倉 周平
設備設計：山本 昌芳・成田 政社
電気設計：渡谷 明広
敷地面積： 181.54 m²
建築面積： 136.06 m²
延床面積： 529.84 m²
構　造：RC造
規　模：地上4階
竣工年：2025 年
所在地：宮城県仙台市青葉区中央四丁目7番33号
写　真：株式会社エスエス　齋藤 涼

東大寺学園第二体育館 菁々館

建築主　：学校法人 東大寺学園
主要用途：学校(体育館)
意匠設計：東原 邦・伊藤 伸司・米田 雄毅・寺嶋 竜太郎・Gde Aditya・Viza Tistamara・Labib・Narizka・Candra
構造設計：土屋 宏明・西村 由妃・Wibisono
設備設計：原田 昌明
電気設計：佐々木 庸介・石田 将也
外装デザイン支援：薩摩 亮治
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス　大久保 敏之
敷地面積： 9,965 m²
建築面積： 3,943 m²
延床面積： 117,393 m²
構　造：RC造
規　模：地上44階・地下1階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：Jl. Guru Mughni Kav. 10.3 No.5, South Jakarta, Jakarta 12930, Indonesia
写　真：Nacasa & Partners　辻谷 宏

國學院大學神殿造替

建築主　：学校法人國學院大學
主要用途：大学(神殿)
意匠設計：福本 敦子・柿澤 英之
構造設計：木村 誠
敷地面積： 12,623.99 m²
建築面積： 133.30 m² (本殿・拝殿・幣殿・神饌所)
延床面積： 105.26 m² (本殿・拝殿・幣殿・神饌所)
構　造：木造
規　模：地上1階
竣工年：2025 年
所在地：東京都渋谷区東4丁目10-28
写　真：株式会社川澄・小林研二写真事務所　船来 洋志

第一生命日比谷ファースト

建築主　：第一生命保険株式会社
主要用途：事務所、店舗
意匠設計：東田 淳行(全体PM)・吉田 健二・佐々木 直人
フィールドフォー・デザインオフィス
並木 良一・島田 雄太・徐 知延・尾花 さき・代田 哲也・中島 幸希
構造設計：佐々木 聡・下鍋田 聡志
設備設計：百瀬 隆
電気設計：尾澤 洋光・鈴木 亮佑・田中 洋平
敷地面積： 7,438.785 m²
建築面積： 6,094.009 m²
延床面積： 97,775.342 m²
構　造：S造・一部SRC造
規　模：地上24階・地下5階・塔屋2階
竣工年：2024 年
所在地：東京都千代田区有楽町 1-13-1
写　真：株式会社エスエス　鳥尾 望・他

メガクニンガン プロジェクト

建築主　：東急不動産インドネシア
主要用途：分譲住宅・賃貸住宅・商業施設
意匠設計：東原 邦・伊藤 伸司・米田 雄毅・寺嶋 竜太郎・Gde Aditya・Viza Tistamara・Labib・Narizka・Candra
構造設計：土屋 宏明・西村 由妃・Wibisono

設備設計：原田 昌明
電気設計：佐々木 庸介・石田 将也
インテリア・ランドスケープデザイン：フィールドフォー・デザインオフィス　大久保 敏之
敷地面積： 9,965 m²
建築面積： 3,943 m²
延床面積： 117,393 m²
構　造：RC造
規　模：地上44階・地下1階・塔屋1階
竣工年：2025 年
所在地：Jl. Guru Mughni Kav. 10.3 No.5, South Jakarta, Jakarta 12930, Indonesia
写　真：Nacasa & Partners　辻谷 宏

創造性の発露

雫は巡り、潮流となる

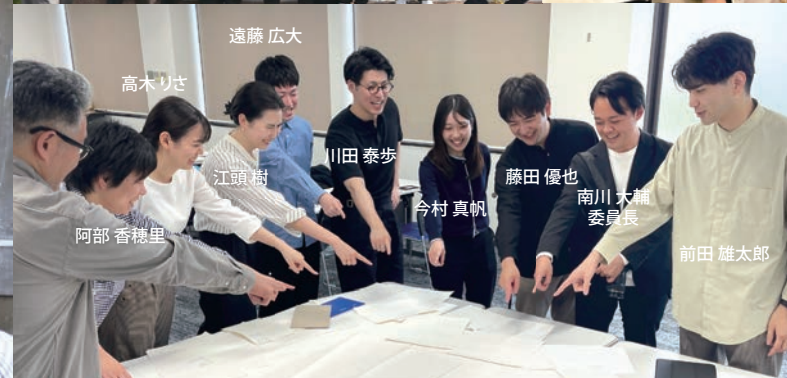
多様な学び・成長・挑戦の場

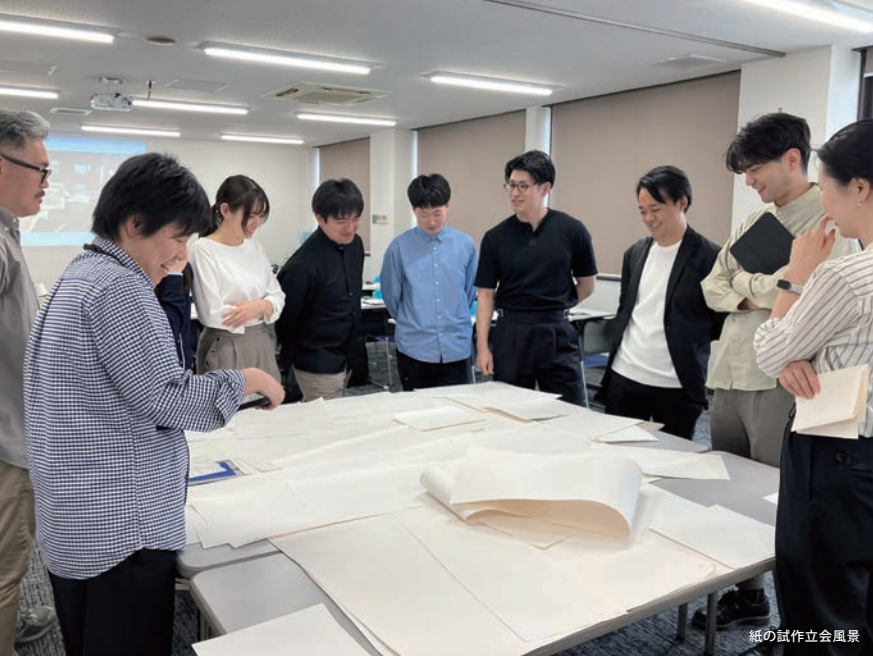
stream DEW 2026



可能性を共有し、新たな挑戦につなげる

全国の設計部から集まったstream DEWメンバーが、それぞれの興味・関心を持ちより、議論することで、新たな設計部の可能性を見出しています。stream DEWの活動は設計部に留まらず、東京木工場や外部の製紙メーカーとの協働によるオリジナルの紙づくりを通して、社内外の垣根を越えたコラボレーションを生み出しています。また、今年も全国の掲載案件を取材する中で、たくさんの気づきと学びを得るとともに、お客様の喜びの声を直接聴くことができました。私たちが現地で感じた設計者の熱い思いや、お客様の喜びの声を全国の設計部に共有し、新たなものづくりの挑戦につなげることを願っています。





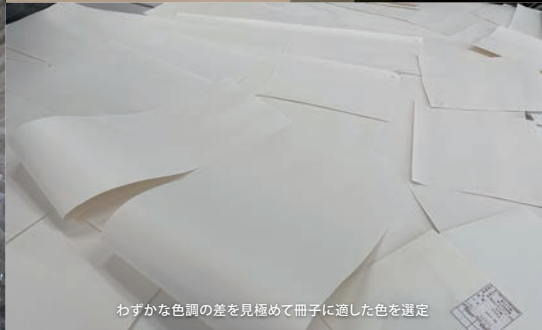
紙の試作立会風景



粉碎した東京木工場の木くず



乾燥前のできたての紙に触れる



わずかな色調の差を見極めて冊子に適した色を選定

「きのしずく」 木工場の木から滴る資源を、紙に

紙について考えることは、地球の森林資源、そして持続可能なリサイクル循環全体について考えることにつながると
いう思いから、昨年度より stream DEW委員会の中に「紙の勉強会」が立ち上がりました。今年度は、さらなる深掘り
として、紙を「選ぶ」だけでなく、紙を「つくる」ことから挑戦しています。

建設業が与える環境への影響を考え、建設時に出る端材等を再利用できないか—— 今回は、その第一歩として、
清水建設の東京木工場（本誌2ページ）で排出される木くずを細かく碎き、紙の原料であるパルプに混ぜ合わせて
紙をつくることから始めました。製紙工場にて、できたての紙を確認し、調整を重ねて完成した本紙は、ほんのりと木
の赤みが感じられる仕上がりになっています。

私たちは、この清水建設オリジナルの紙を「kinoshizk（読み：きのしずく）」と名付けました。建具や什器をつくる際
に削り取られて不要になった木くずが、雫のように滴り落ちて再び資源となり、紙という役割を担って、DEW冊子を
彩ることを願っています。

木くずを再利用した紙づくり
stream DEW 2026

紙から考える持続可能な未来

今年のDEW冊子の表紙には、FSC®認証材およびその他管理原材料から作られ環境に配慮したFSC®森林認証紙を、メインの
紙には東京木工場で排出される木くずを紙の原料の一部として用いた混抄紙「kinoshizk」を採用しました。この冊子自体が
建設業の資源循環のなかにあることを感じてもらえれば幸いです。
今回の紙製作にあたり、多大なるご協力を賜りました、株式会社竹尾様と大王製紙株式会社様に心より御礼申し上げます。

発行日：2026年9月
編集・発行：清水建設株式会社 設計本部
〒104-8370 東京都中央区京橋2-16-1
Tel:03-3561-1111（代）
編集事務局：設計本部 設計企画室
印刷：株式会社ビーディシステム
年1回発行予定【非売品】



このカタログは、環境に配慮した FSC®認証紙を使用しています。



このカタログの中頁は、対パルプ比3%以上の木くずを配合しています。 清水建設株式会社は、木くずを資源として有効活用しています。

